

# 『新唐書』西域伝訳注(一)

小 谷 仲 男  
菅 沼 愛 語

訳者のまえがき

以下は『新唐書』西域伝の訳注の前半部分であり、後半は来年度に刊行を予定する。中国歴代王朝史(正史)のなかで、「西域伝」あるいは「西戎伝」と呼ばれるものは、中国が西域と関係を持つ中で生じた事件、外交について記録し、今日に残ったものである。当然、それは中国側の立場で書き記されており、西域の歴史そのものではない。一方、西域自身の歴史記録は皆無に近く、この「西域伝」の持つ価値はこの上なく貴重である。とくに唐代とそれ以前の西域は、中国をめぐる四域のなかで特別の意味をもつものであった。また航海術、造船技術の未発達な時代において、いわゆる陸路シルクロードは東西世界を結ぶ主要交通路であり、それを含む西域はまさにその門戸であった。私たちが世界史を描くうえで、「西域伝」は参照を欠かせない歴史記録である。

中国正史における「西域伝」訳注の必要性は早くから感じられていたが、従来の中国学だけでは読みこなせない内容が多くあり、日本ではなかなか実現しなかった。しかしフランスのシノロジストのシャヴァンヌE. Chavannesは、すでに一九〇三年に『新唐書』西突厥伝をフランス語に全訳し、さらに西突厥と関わりの深かった西域諸国を『新唐書』西

域伝からいくつか選んで翻訳、出版した。今回の私たちの翻訳と重なるところがある。シャヴァンヌは引き続き一九〇五年に『三国志』魏書の裴松之注に引用された『魏略』西戎伝、一九〇八年には『後漢書』西域伝のフランス語訳を出版した。いずれも漢文の一字一句もおろそかにせず、率直、簡潔な翻訳であり、現在も価値を失っていない。これまでに欧米の研究者はもっぱらこのシャヴァンヌ訳に依存して大きな成果をあげてきた。

日本では内田吟風が中国正史西域伝の訳注を企画し、歴代西域伝のなかでも、いちばんテキスト上の問題の多い『魏書』西域伝の訳注を完成させた。しかし残念ながらそのほかは未完成に終わった（『中国正史西域伝の訳注』龍谷大学文学部一九八〇年）。一方、『史記』、『漢書』、『三国志』の正史は中国文学専攻の研究者たちの手によってあいついで全訳され（一九六二～一九七七年）、そこに含まれる『史記』「大宛伝」、『漢書』「西域伝」、『魏略』「西戎伝」の現代語訳が出現することになった。また『後漢書』西域伝に関しては、小谷仲男が訳注を発表し（『シノ・カロシュティ貨幣の年代』付録『後漢書』西域伝訳注）『富山大学文学部紀要』第三〇号、一九九九年）、吉川忠夫は『後漢書』全文の訓読翻訳を完成した（全一一冊、岩波書店二〇〇一～二〇〇七年）。以上の結果、現在、日本語の翻訳によって正史西域伝の多くが通読できるようになったことは喜ばしい。

唐代の西域については新・旧の両唐書に記載がある。『旧唐書』西戎伝（後晋・劉昫等撰九四五年完成）と『新唐書』西域伝（宋・歐陽脩・宋祁等撰一〇六〇年完成）とである。両者の編纂方針には若干の相違があり、内容は一長一短であると言われる。一足先に完成を見た正史北狄伝の日本語訳『騎馬民族史』全三巻、平凡社東洋文庫一九七一～七三年は、新・旧両唐書の北狄伝について、重複をいとわずに翻訳した。一応それが理想的ではあるが、今回は『新唐書』西域伝だけを選んで翻訳した。両書の西域伝を読みくらべると、『旧唐書』西戎伝は原史料（実録、公的記録など）の文章をそのままに抜き書きするところが多く、『新唐書』のほうは、『旧唐書』に依拠しつつも、文章表現を節略し、より難解

な表現に改変するところがあり、ときにはそれが史料価値を損ねていることも感じられた。したがって今回の訳訳では『旧唐書』をたえず参照し、誤訳がないようにつとめた。一方、『旧唐書』西域伝は八百年頃以降の記事が極端に欠ける。手元に史料が集まっていなかったせいであろう。『新唐書』の編者はそれを不満として、さまざまな分野にわたって史料を探索し、唐代末年にいたるまでの内容を補填した。それが『新唐書』西域伝の長所である。ただそのさい公的資料以外からも記事を採用したので、歴史記録として信憑性に問題も生じた。今回はそれらの新情報については、つとめてその出拠を探しあて、出典に相当する現存文献名を、訳文のなかに括弧書きで示すことにした。そうした作業は訳文を吟味する上にも役立つ。翻訳を作成するに当たって、これまで発表されてきた個別テーマの研究論文に助けられたところが多く、感謝したい。しかし参照が十分でないところはまだ多く、翻訳にも誤解があるとおもわれるので、この機会にいろいろご教示をいただければ幸いである。なお、翻訳の底本にしたものは、評点本『新唐書』「西域伝」、中華書局一九七五年版である。

『新唐書』卷二二一上 西域伝

泥婆羅<sup>1</sup>（ネパール）

泥婆羅<sup>1</sup>は、吐蕃の西にある楽陵川（阿龍川、Arun river）からすぐのところにある。国土は赤銅とヤクを多く産出した。国人の風俗は翦髪で、前髪が眉にまで達している。耳には穴を穿っていた。アーチ状になった竹筒で楕円形の杵をつくり、ゆるやかに肩に至るのがよいとされた。さじと箸がないので、国人は手づかみで食べた。その国の器はみな銅製である。その家屋の板囲いに模様を描いた。牛を使用した耕作方法を知らないため、田畑が少ない。それゆえ、国人は生業として商業に習熟している。一枚の布で体を覆い、一日に数回、沐浴する。博戯を重んじ、天文学と曆術に通じ

ていた。天神を祀るのに石を刻んで像をつくり、この像に毎日、水を浴びせ、煮た羊肉をそなえて天神を祀る。銅を鑄造して貨幣をつくる。貨幣のおもてに人のかたちを描き、裏側に牛や馬のかたちを描いた。この国の君主は、真珠、瑠璃、車渠（貝殻）、珊瑚、琥珀を身につけ、纓絡（ネックレス）をたらし、耳には金鉤・玉の耳飾りをつけ、宝剑<sup>4</sup>を腰に帯びて、獅子の足の格好をした四脚寝台に座り、香を焚いて花を堂にしいた。大臣は地べたに座って敷物をしかない。左右に武器を持った兵士数百が侍っている。宮中には七重の楼閣があり、その屋根は銅製の瓦で覆われていた。柱と梁はみな様々な寶石で飾られており、宮殿の四隅には銅製の水槽が置かれていた。その下には黄金の龍がおり、龍の口からは激しく水が流れ出て槽の中に注ぎ込んでいた<sup>5</sup>（『旧唐書』卷一九八泥婆羅伝）。

初め王の那陵提婆（ナーレンドラ・デーヴァ Narendradeva）の父親が、叔父によって殺されたため、提婆は吐蕃に亡命した。吐蕃が提婆を受け入れたので、提婆は吐蕃に臣従した（『旧唐書』泥婆羅伝<sup>7</sup>）。貞観中、太宗は李義表を天竺に派遣した。李義表が泥婆羅を通過したので、提婆はたいそう喜び、使者を案内して阿耨婆沱池（アジューヴァ）<sup>8</sup>を見学した。池の広さは数十丈、その水はいつも沸騰していた。その水は、日照りの時も大雨の時も、涸れることも溢れることもなかったと伝えられている。池の中に物を投げ込むと、たちまち煙が生じ、その上に釜をかけると、すぐに煮あがってくる（『旧唐書』泥婆羅伝）。

貞観二十一年（六四七）、泥婆羅の使者が入朝し、波稜（ホウレン草）、酢菜、渾提葱を献上した（『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三、『唐会要』卷一〇〇）。永徽の時（六五〇～六五六年）<sup>9</sup>、王の戸利那連陀羅がまた使いを派遣して入貢した（『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三）。

註

(1) 『大唐西域記』卷七尼波羅国。水谷真成一九七一…二四〇～二四一、季羨林一九八五…六一二～六一四。

(2) 青木文教一九九〇・七七七に「後蔵地方の女性風俗」の写真が載っており、前懸をたれ、首に半楕円形のわくがた(框型)の飾りをつけている、と記されている。

(3) 『旧唐書』卷一九八泥婆羅伝では、この君は、王の那陵提婆になっている。

(4) 「伏突」は『周書』卷五〇突厥伝を参照。

(5) 「其君服珠：口激水仰注槽中」は佐伯和彦二〇〇三・二二二に抄訳引用。

(6) バジラーチャリヤ一九九九・八七七は、リツチャヴィ時代の銘文からも政変が裏付けられると述べている。

(7) ナーレンドラ・デーヴァ(在位六四三～六七九年)については佐伯和彦二〇〇三・一〇四、一二〇～一二八を参照。

(8) 水谷真成一九七一・二四一の注四を参照。

(9) 『旧唐書』泥婆羅伝では永徽二年。

(10) 戸利那連陀羅(シュリ・ナレンダラ)はナーレンドラ・デーヴァのこと。『冊府元龜』に基づく。

### 党項(タンゲート)

党項は漢代の西羌の別種で、魏晋の後、次第に甚だしく衰微した。北周が宕昌、鄧至を滅ぼしたので、党項は初めて強くなりはじめた。その地は昔の析支であり、東は松州、西は葉護(西突厥)、南は春桑・迷桑などの羌、北は吐谷渾に隣接していた。険しい山谷に居住し(『隋書』卷八三党項伝)、その長さは三千里にわたる。姓のちがいによって部落をなし、その一つの姓がまたさらに分かれて小部落をなし、大きいものでは万騎、小さいものでは数千騎の兵力を持っており、互いに相手を服属させることができない。そのため、細封氏、費聽氏、往利氏、頗超氏、野辞氏、房当氏、米禽氏、拓拔氏があり、拓拔氏が最強で(『隋書』党項伝、『旧唐書』卷一九八党項伝)、定住し、家屋があり、ヤクの尾

や羊毛を織つて家を覆い、一年に一度、その毛織物を交換した。

党項は武を尊び、法令も賦役もない。人々の寿命は長く、多くのものが百歳を越えた。盗みを好み、互いに略奪しあつた。彼らは、復讐することを最も重んじた。復讐をいまだに果たせていないものは、蓬のように髪をふり乱し、垢まみれの顔で、裸足のまま過ごし、草を食べる。復讐を遂げた後に、ようやく普通の生活に戻る。男女は、皮衣と粗い繊維の衣服を着用し、毛織物をまとつた。ヤク、ウシ、ウマ、ロバ、ヒツジを牧畜して食べ、耕作はしなかつた。その地は寒く、五月に草が生え八月に霜がおりた。文字はなく、草木の様子をうかがつて歳時を識別した。三年に一度、互いに集まり、牛と羊を殺して天を祀つた。他国から麦を得て酒を醸造した。父親の妾、伯母・叔母、兄嫁、息子や弟の妻を、妻となしたが、ただ同姓の女性は娶らなかつた。年老いて亡くなつた場合、子孫達は泣かなかつた。しかし、幼くして亡くなると、天枉と称して、家族は悲しんだ（『旧唐書』党項伝）。

貞観三年（六二九）、南会州都督の鄭元璠は使者を派遣して降服するように説得したので、党項の酋長・細封歩頼が部落を挙げて降服した。太宗が璠を押し下して彼らを慰撫したので、細封歩頼はこれより入朝し、太宗から与えられる宴や賜わりものは、他とは違つて別格であつた。太宗は細封歩頼の領地を軌州となし、細封歩頼に刺史を授与した。細封歩頼は、兵を率いて吐谷渾を討伐したいと請願した。その後、酋長達がことごとく内属したので、その地を岷州、奉州、巖州、遠州の四つの州となし、首領たちを刺史に任じた。

拓拔赤辞というものがおり、初めは吐谷渾に臣従していた。吐谷渾の慕容伏允が、赤辞を厚遇して通婚したので、諸々の羌族はすでに唐に帰順していたにもかかわらず、赤辞だけがひとり唐に帰順してこなかつた。李靖が吐谷渾を討伐した時、赤辞は狼道峽に駐屯して唐軍に抵抗した。廓州刺史の久且洛生が、赤辞を説得して降伏させようとしたが、赤辞は「吐谷渾王は私のことを腹心として遇してくれている。他のものなど知らぬ。もし速やかにこの場から立ち去らない

のなら、おまえを斬り殺して私の刀を穢すことになるぞ。」と言い返してきたので、久且洛生は怒り、輕騎兵を率いて肅遠山で赤辞を撃破し、数百級を斬首して雜畜六千を捕獲した。太宗は、この勝利によって、降服すれば生命の保障をしたので、赤辞の従子・思頭は、ひそかに唐に帰順し、その部下の拓拔細豆もまた降伏した。赤辞は宗族が離反してしまつたので次第に自らも帰順することを望み、岷州都督の劉師立も帰順を勧誘したので、赤辞は思頭とともに唐に内属した。そこで、太宗はこの地を懿州・嵯州・麟州・可州など三十二の州となし、松州を都督府となして、赤辞を西戎州都督に拔擢し、李姓を賜わつた(『新唐書』卷四三地理志)。それ以後、党項からの朝貢が絶えることはなかつた。これによって、黄河の源流にある積石山から東の地はすべて中国の領地となつた。この後、吐蕃が次第に隆盛したので、拓拔は恐れて内地への移住を請願した。そこで初めて慶州に静辺などの州を設置して党項をここに住まわせた。この地が吐蕃の領土と化すと、この地に住んでいるものはみな吐蕃に從属する事となり、さらに弭葉(ミーニャク)<sup>2)</sup>と号するようになった。

また黒党項という部族もいた。黒党項は、赤水の西に住んでいた。その部族長は、敦善王と号し、吐谷渾の王・慕容伏允が李靖の軍に敗北してこの地に逃走してきた時には、伏允は敦善王を頼つてきた。吐谷渾が唐に服従するようになると、敦善王もまた朝貢してきた。雪山に住んでいるものたちを破丑氏といつた。

白蘭羌<sup>3)</sup>という部族がいた。吐蕃はこれを丁零と呼んでいた。白蘭羌は、その左の部族が党項に属し、右の部族は多弥<sup>4)</sup>と隣接していた。勝兵を二万人擁し、戦鬪において勇敢に戦い、用兵を善くするところは、民族的に党項と同じであつた。武徳六年(六二三)、使者が入朝した。翌年、高祖はこの地を維州と恭州の二州となした。貞観六年(六三二)、契苾数十万とともに内属した。永徽年間(六五〇〜六五六)には、特浪の生羌の卜楼と大首領・凍就<sup>5)</sup>が部衆を率いて到来し、内属したので、その地を劍州となした。

龍朔年間（六六一～六六三）以後、白蘭、春桑、白狗羌が吐蕃の臣下となり、吐蕃に兵士を提供してその先鋒になった。白狗と東会州は隣接し、勝兵はわずかに千人であった。西北に在るもので天授年間（六九〇～六九二）の間に内附したものは、戸数にして約二十万だった。唐は、その地を朝州・呉州・浮州・帰州などの十州となし、靈州と夏州の間に散居させた。至徳年間の末（七五七）、党項は吐蕃に誘われ、吐蕃のスパイとなつて辺境地帯を略奪した。しかし、彼らは急に後悔して来朝し、靈州の軍糧運送を援助したいと請願した。乾元年間（七五八～七六〇）、〔安史の乱が原因で〕中国がしばしば乱れたので、党項は邠州と寧州に入寇した。肅宗は、郭子儀に詔して朔方・邠寧・鄜坊の三節度使の任務を統轄させて、鄜州刺史の杜冕と邠州刺史の桑如珪に二部隊に分けて出撃させた。郭子儀が邠州・寧州に到着すると、党項は潰走した。

上元元年（七六〇）、涇州・隴州の部落十万人が、鳳翔節度使の崔光遠のもとに来て降伏した。上元二年（七六一）、党項は渾・奴刺と連合して、宝鶏を襲撃し、吏民を殺害して財物を掠め取った。大散関（宝鶏の南）を焼き、鳳州に入寇して、刺史の蕭棧、節度使の李鼎がこれを追撃した。翌年、党項がまた梁州を攻撃したので、刺史の李勉は逃走した。このため党項は奉天まで進撃し、華原・同官を大いに略奪して去った。詔して、藏希讓を李勉に代えて刺史となした。これによって、帰順・乾封・帰義・順化・和寧・和義・保善・寧定・羅雲・朝鳳のおよそ十州の部落が藏希讓を訪れ、よしみを通じて節と印を乞うたので、詔してこれを認めた。

僕固懷恩が叛いた時（広徳二年＝七六四年）、懷恩は党項・渾・奴刺を誘つて入寇した。僕固懷恩は数万の兵を率いて鳳翔と鞏屋を略奪した。党項の大酋長の鄭廷と郝徳は同州に入寇したので、同州刺史の韋勝は逃走した。<sup>(7)</sup> 節度使の周智光は、鄭廷らを澄城で撃破した。一カ月後、鄭廷らがまた同州に入寇し、官庁および民間の家屋を焼き、馬蘭山に塞を築いた。郭子儀は軍勢を派遣してこれを襲撃し、退却して三堡を保った。それから、郭子儀は慕容休明を派遣して、鄭

廷と郝徳を諭させて降伏させた。

郭子儀は、党項と吐谷渾の部落を塩州・慶州などの州に分散させて住まわせた。それらの地と吐蕃が非常に近く、互いに連合して脅威になりやすかったので、上表して、靜辺州都督、夏州・樂容などの六つの府の党項を銀州の北、夏州の東に移動させ、寧朔州の吐谷渾を夏州の西に住まわせて、引き離して唐の脅威にならないよう防いだ。靜辺州の大首領、左羽林大將軍の拓拔朝光ら五人の刺史を召して入朝させ、厚く賜わりものを与えて帰還させ、各々の部族を安んじさせた。これより以前、慶州には、破丑氏族が三部族、野利氏族が五部族、把利氏族が一部族おり、おのおの吐蕃と婚姻して互いに援助しあっていたので、吐蕃の贊普は、これらを王とした。このため辺境地帯が乱れること十年餘に及んだ。郭子儀は上表し、工部尚書的路嗣恭を朔方留後、將作少監の梁進用を押党項部落使とし、行慶州を設置させた。さらに郭子儀は「党項は、ひそかに吐蕃と結んで事變を起こそうとしております。ですから党項に使者を派遣し、これを招慰して謀叛の機会を取り除くべきです。また梁進用を慶州刺史に任命し、厳しく警邏させて、党項と吐蕃との交通路を遮断すべきです。」と進言した。代宗は、郭子儀の意見をもつともであるとした。また、郭子儀は上表して、靜辺、芳池、相興の三州(8)に都督と長史を置き、永平、旭定、清寧、寧保、忠順、靜塞、万吉などの七つの州に都督府をそれぞれ置くよう進言した。ここに至り、破丑、野利、把利の三部族と、思樂州の刺史・拓拔乞梅らは、みな入朝し、宜定州刺史の折磨布落、芳池州の野利部は、並びに綏州、延州に移された。

大曆の末、野利禿羅都と吐蕃が結んで叛き、他の部族にも謀叛をけしかけたが、他部族はこれに呼応しなかった。郭子儀が、野利禿羅都を撃つて、禿羅都を斬つたので、野利景庭、野利剛は、部族数千人を率いて雞子川において帰順した。六州の部落というのは、野利越詩、野利龍兒、野利厥律、兒黃、野海、野寧などで、慶州に住んでいるものを東山部と号し、夏州のものを平夏部と号した。永泰年間(七六五〜七六六)の後、党項は次第に石州に移動したが、その後、

永安の將・阿史那思暎〔昧〕による税の取立てが際限なかったので、ついに耐え切れず、党項は河西に逃走した。

元和（八〇六―八二〇）の時、宥州を復置して党項を護つたが、大和年間の中頃になると党項は次第に強盛になり、しばしば国境地帯を略奪した。党項は、武器や防具が鈍くて粗末なので、唐兵の武器の精強さを恐れ、良馬を売っては鎧を買い、良い羊を売っては弓矢を購入した。そこで、党項を危険視した鄜坊道軍糧使の李石が上表し、商人が、軍旗、甲冑、種々の武器を持つて党項の部落に入ることを禁止した。もし密告したものがいたら、その密告者に罪人の財産を没収し、褒美として与えた。開成年間（八三六―八四〇）の末になると、党項部族はいよいよ盛んになり、富裕な商人が絹織物を持ち込み、党項からヒツジ・ウマを買い入れた。藩鎮の役人はそれに便乗して、ヒツジ・ウマを無理やり売らせて代価を与えない事があつた。このため党項の部族民は怒り、互いに誘いあつて反乱を起こし、靈州、塩州に攻め込んだので道が不通になった。武宗は侍御史を使招定に任じ、三印に分け、邠州、寧州、延州を崔彦曾に属させ、塩州、夏州、長澤を李鄂に属させ、靈武、麟州、勝州を鄭賀に属させて、みなに緋衣と銀魚の印を賜わつたが、功を奏さなかつた（『旧唐書』党項伝は、ここで終わる）。

宣宗の大中年（八五〇）、党項が邠州と寧州を略奪したので、鳳翔節度使の李業、河東節度使の李拭に詔して節度している軍勢を併せて、これを討伐しよう命令し、宰相の白敏中を都統となした。宣宗が近苑に出向いたところ、あるものが一本の竹を屋外に植えていた。見ると、その竹は、わずか一尺の高さで、宣宗から百歩ばかり遠ざかつていた。宣宗は矢の命中の成否にことよせて言った。「党羌は、いまや追いつめられた敵だが、窮地に陥りながらも、なお年ごとに唐の辺境を荒らしている。いま私は約束しよう。もし竹のまん中に命中することができれば、党項はまさに、おのずから滅びるであろう。命中しなければ、私は天下の兵を求めて党項を殲滅しよう。この賊に子孫を残させないぞ。」近臣たちが注目するなか、宣宗がひとたび矢を放つと、竹が割れ、矢が貫通したので、近臣らは万歳と叫んだ（『唐語林』卷

四豪爽<sup>(9)</sup>。一カ月もたないうちに羌は果たして破れ滅び、殘党は南山に逃亡した。

初め天寶年間(七四二〜七五六)の末に、平夏部の族長、拓拔思寂<sup>(10)</sup>が戦功を上げたので、容州刺史、天柱軍使に抜擢した。思寂の子孫の拓拔思恭が、咸通年間(八六〇〜八七四)の末に、ひそかに宥州を占領して刺史を自称した。黄巢が長安に侵入したので、拓拔思恭は鄜州刺史の李孝昌とともに壇を築いて犠牲を供え、賊を討伐する事を誓った。僖宗はこれを賢明な行為とし、思恭を左武衛將軍、權知夏綏銀節度事に任命した。拓拔思恭が、王橋に留まった時に黄巢に打ち破られたが、鄭畋ら四人の節度使とともに盟約して渭橋に駐屯した。中和二年(八八二)、詔して拓拔思恭を京城西面都統、檢校司空、同中書門下平章事に任命した。にわかには思恭を昇進させて、四面都統、權知京兆尹となした。黄巢が平定されると、思恭に太子太傅を兼ねさせ、夏国公に封じて、李姓を賜わった。嗣襄王熈の乱が勃発すると、拓拔思恭に詔を下して賊を討伐させたが、軍勢が出撃する前に、思恭は亡くなった。そこで、思恭の弟の思諫を代わりに定難節度使に任じ、もう一人の弟の思孝を保大節度使、鄜・坊・丹・翟などの州の觀察使、ならびに檢校司徒、同中書門下平章事に任命した。王行瑜が叛くと、思孝を北面招討使に任命し、思諫を東北面招討使に任じた。思孝もまた、この反乱によって鄜州を取り、ついに節度使となり、累進して侍中も兼ねたが、年老いたために弟の思敬を推薦して保大軍兵馬留後となし、にわかには節度使となした。

註

(1) 「拓拔氏」については岡崎精郎一九七二：二二〜一五等を参照。

(2) 朔薬については西田龍雄一九七〇：六五〜六七を参照。

(3) 白蘭については山口瑞鳳一九七一を参照。

(4) 多弥については岡崎一九七二：二七、岡崎一九八三：二八八注二六、注三〇、佐藤長一九七八：三四五を参照。

(5) 「特浪の生羌のト襟と大首領・凍就」は、永徽二年の出来事（『唐会要』卷九八白狗羌）と永徽五年の出来事（『冊府元龜』卷九七七外臣部降附）を一つにまとめて記している。岡崎精郎一九八三・四六注三三三。

(6) 広徳二年（七六四）十月、僕固懷恩は反乱を起こすと、吐蕃・ウイグル・党項などと連合して西北に入寇した。

(7) 『資治通鑑』卷二二三・永泰元年（七六五）十月癸亥条。

(8) 『文献通考』卷三三四、岡崎精郎一九七二・四三三。

(9) 『唐語林校証』上、中華書局、一九八七年。

(10) 拓拔思寂については岡崎精郎一九八四・四二注六四を参照。

## 東女国

東女国<sup>(1)</sup>は、蘇伐刺拏瞿咀羅（スヴァルナゴトラ）<sup>(2)</sup>ともいい、羌族の別種である。西海（インド洋）にも、女の王を戴く国があるので、区別するために「東」をつける。東は吐蕃、党項、茂州（四川省）に接し、西は三波訶国<sup>(3)</sup>に属し、北には于闐、東南は雅州の羅女蛮、白狼夷に属していた。この国の面積は、東西に九日、南北に二十日行程の広さであった。八十の城を有し、女を君主に戴いている。康延川に住み、険しい土地が四方を取り囲んでいた。弱水が南に流れている。人々は革を縫いあわせて船を造った。戸数は四万戸で、勝兵は一万人であった。王のことを「賓就」といい、官のことを「高霸黎<sup>(4)</sup>」といったが、これは宰相に相当した。外廷にいる役人は、男子をこれにあてた。およそ号令は女官が内廷から伝え、男の役人がこれを受け取って実行に移した。王の侍女は数百人おり、王は五日に一度、政務をとり行った（『隋書』卷八三西域・女国伝）。王が亡くなると、国人は金銭数万を王族に納め、王族の中から淑女二人を求め、そのうちの年長者を大王とし、年少者を小王となした（『旧唐書』卷一九七南蛮・東女伝）。大王が死ぬと、小王を

後継ぎに立てた。あるいは、姑が死ぬと嫁がその後を継いだ。王位の篡奪はなかった。住まいはみな重屋で、王は九層、国人は六層であった。王は、青毛の綾のスカート、青色の袍を着用したが、服の袖は地面に引きずった。冬は子羊の皮衣を着用し、文錦で飾った。小さな鬢髻をつくり、耳には璫（イヤリング）をたらしした。足には鞣鞞（皮靴）を履いた。鞣鞞とは履き物のことである。この国の習俗では、男子を軽んじた。身分の高い女性はみな男を従者として有していた。侍男は、被髪で、顔面を青く塗り、ただ戦争と耕作にのみ努めた。子供は母親の姓に従った。その地は寒く、麦をよく産し、羊馬を牧畜し、黄金を産出した。風俗はだいたいた竺と同じであった。十一月を年始とした。巫者は十月に山中に詣で、酒かすと麦を敷き、まじないを言つて鳥の群れを呼ぶ。にわかによつて来る鳥があつて、その姿は鶏のようである。その腹を割いて腹の中を見、腹の中に穀物があれば、その年は豊作であるが、そうでなければ災厄が訪れる。それで、この占いの名を鳥卜といつた。三年間喪に服し、衣服を変えず、くしけずる事も沐浴もしなかつた。貴人が亡くなると、その皮膚を剥ぎ取り、骨を甕の中に収め、金粉を塗つて、墓に埋める（『隋書』女国伝）。王を葬る際には、殉死するものは数十人に及んだ。

武徳年間（六一八―六二六）に、王の湯滂氏が初めて遣使して入貢した。高祖はこれに対して厚く報いたが、西突厥が略奪するので通じることができなくなつた。貞観年間に、使者がまたやつて来たので、太宗は璽制して使者を慰撫した。顕慶の初め、遣使して、高霸黎の文と王子の三盧を来朝させたので、高宗は彼らに右監門中郎将を授与した。王の斂臂レヒが、大臣を遣わして官号が欲しいと請願したので、則天武后は斂臂を冊立して左玉鈐衛員外將軍を授与し、瑞錦の服を下賜した（『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二）。天授と開元の間、王と王子が再び来朝したので、玄宗は詔して宰相とともに長安の曲江池で宴をし、王の曳夫を封じて、帰昌王、左金吾衛大將軍となした。後には男子を王となした（『冊府元龜』卷九六六外臣部繼襲）。

貞元九年（七九三）、王の湯立悉は、白狗君、及び、哥隣君の董臥庭、逋租君の鄧吉知、南水君の薛尚悉曩、弱水君の董避和、悉董君の湯息贊、清遠君の蘇唐磨、咄覇君の董藐蓬とともに、みなで劍南節度使の韋皋のもとに赴き、唐への内附を希望した。その種族は、西山、弱水に散居し、自ら王を称していたけれども、けだし小さな部落ばかりであった。吐蕃に河西・隴右を奪われた後、これらの部落は尽く吐蕃の下に従属した。その部落は数千戸であったが、県令を置き、年ごとに絲絮（絹と綿）を吐蕃に輸出した。<sup>(6)</sup>しかし、ここに至り、天寶の時に天子から賜わった詔勅を取り出して、韋皋に献上した。韋皋は、東女の民人を維州、霸州などに住まわせ、牛や糧食を与え、なりわいを治めさせた。湯立悉らが入朝すると、官祿を賜わったが、それには差があった。ここにおいて松州羌の二万口も踵を接して内附してきた。湯立悉らは刺史を与えられ、みな代々官職を世襲したが、しかし、ひそかに吐蕃に内附したので、これを両面羌と称した。

## 註

- (1) 女国の位置については、山口瑞鳳一九八三・二二五～二三四。
- (2) 『大唐西域記』卷四「東女国」（水谷真成一九七一・一五六、季羨林一九八五・四〇八）。
- (3) 三波訶国については佐藤長一九五八・一五〇、一九九を参照。
- (4) 『旧唐書』卷一九七東女伝では高霸。
- (5) 『旧唐書』東女伝では「鳥の腹の中に霜や雪があつたら翌年は必ず災厄が多い」という占いの結果になっている。
- (6) 『旧唐書』東女伝から補って翻訳。

## 高昌（トルファン）

高昌は長安の西四千餘里の所にあり、国土の面積は東西八百里、南北五百里で、およそ二十一の城を有していた。首

都の交河城は、漢の車師前王国の王庭があったところである。田地城は戊己校尉の治所である。勝兵は一万いた。土壤は肥沃で、麦(ムギ)、イネは、年に二度収穫できた(二毛作であった)。高昌には白疊(綿花)という名前の草があった。人々は白疊の花を摘んで織り、布を作った(『旧唐書』卷一九八高昌伝)。この国の風俗では、辮髪にし、髪の毛をうしろに垂らした。

高昌の王麴伯雅は、隋の時、皇帝の親族宇文氏の娘を妻にした。宇文氏は華容公主と号した。唐の武徳の初め(武徳二年)<sup>(2)</sup>麴伯雅が亡くなり、息子の文泰が即位し、遣使して伯雅の死を告げたので、高祖は使者に命じて弔問させた。五年後の武徳七年、高昌は、身長が六寸、体長が一尺餘の犬を献上した。この犬は、馬の手綱を口にくわえて先導することができ、また燭台を口にくわえることもできた。犬は拂菻が原産であると言われ、中国はこれによって初めて拂菻狗を有する事になった(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。

太宗が即位すると、高昌は黒狐の皮衣を献上したので、太宗もそのお返しに、麴文泰の妻宇文氏に華鐙(花かんざし)<sup>(4)</sup>を一つ下賜した。これに対し、宇文氏も太宗に玉盤を献上した。およそ西域諸国の動静は、高昌が、すぐにこれを唐に奏上した(『旧唐書』高昌伝)。貞観四年(六三〇)、麴文泰が来朝したので、太宗は礼賜を甚だ篤く与えた。また文泰の妻の宇文氏が李王室の皇族になりたいと申し出たので、太宗は詔して宇文氏に李姓を賜わり、常楽公主に封じた(『冊府元龜』卷九九九外臣部入覲)。

これよりしばらくして麴文泰と西突厥が通好した<sup>(5)</sup>。西域諸国は朝貢する際に高昌を通過したが、これ以後、使者達はみな麴文泰によって朝貢路を遮られ、唐への献上品を奪い取られた。伊吾(ハミ)は、以前西突厥に臣従していたが、唐に内属したため麴文泰と西突厥の葉護は共謀して伊吾を攻撃した<sup>(6)</sup>。太宗は詔を下して麴文泰の背信行為を詰問し、高昌の大臣冠軍・阿史那矩を召し寄せて相談しようとしたが、麴文泰は太宗の命令にそむき、阿史那矩を唐には派遣せず、

代わりに長史の麴雍を派遣して謝罪した。初め、隋の大業年間の末、中国の多くの民が東突厥に亡命したが、東突厥の頡利可汗が敗北すると、高昌に亡命するものがあつた。太宗は詔を下して、中国から高昌に逃亡したものを中国に護送するよう麴文泰に命じたが、文泰は彼らを高昌に拘留して中国に帰さなかつた。また文泰は西突厥の乙毗設とともに焉耆の三つの城を撃破し、焉耆の民を捕虜にしたので、焉耆王は太宗に高昌の所業を訴えた。<sup>8</sup>太宗は、虞部郎中の李道裕を派遣して麴文泰の行状を詰問させた。麴文泰がまた遣使して太宗に謝罪したので、太宗はその使者を引見し叱責して言つた。「おまえのあるじ麴文泰は、数年来、朝貢をしてこない。文泰には臣下としての礼がない。勝手に官職を設け、中国の百僚を僭称し、まねている。正月には万国の使者達がごとごとく来朝したが、麴文泰は来なかつた。かつて唐の使節が高昌を訪れたが、文泰は唐使に向かつて横柄に言つた。「鷹が天に舞えば雉は草むらに隠れる。猫が堂で遊べば鼠は穴の中に逃げて安んじる。おのおの、その適所を得て、どうして心を楽しませないことがあるうか？」<sup>10</sup>西域の使者達が入貢しようとする、高昌は、ことごとくこれを拘束する。また麴文泰は薛延陀に遣使して、こう言つたそうだな。「あなたはすでに自ら可汗になつた。唐の天子と同等である。なんで唐の使節に拜謁する必要があるうか？」朕は来年、軍隊をおこして、なんじの国を虜にする。帰つて、なんじのあるじに言うがよい。よく自ら図れ、とな。」この時、薛延陀の可汗が、唐軍のために教導をしたいと請願してきた。<sup>11</sup>そこで民部尚書の唐儉が薛延陀に行き、可汗とかたく約した。太宗はまた璽書を下して麴文泰に禍福を示し、入朝を促させたが、文泰はついに病氣を理由に入朝しなかつた。そこで太宗は、侯君集を拜して交河道大総管となし、左屯衛大將軍の薛萬均、薩孤吳仁をその副官に任命し、契苾何力を葱山道副大総管となし、武衛將軍の牛進達を行軍総管に任じて、突厥と契苾の騎兵数万騎を率いさせて、高昌を討伐させた。群臣は太宗を諫めた。万里も行軍しては、兵士の志氣を得るのは難しい。それに、天界の絶域（＝高昌）を得たとしても、これを守りきることはできない、と言つて群臣は太宗に諫言したが、太宗は聞き入れなかつた。一方、麴文泰

は近臣に言った。「昔、私が隋に入朝した時、秦隴の北にある城邑を見たが、荒れていた。隋の時代の比ではない。唐は、いま高昌を討とうとしているが、兵が多ければ兵糧は及ばない。もし唐軍の兵力が三万以下ならば、私はよくこれを制圧する事ができよう。砂漠を渡れば唐軍は疲労し、動きも鈍くなる。気楽に唐軍の疲弊を待ち、横になって敵の疲弊を収めればよいだけだ。」

しかし貞観十四年(六四〇)、麴文泰は唐軍が磧口に達したという事を聞いたとたん、動悸がし、驚きふるえあがって、はかりごととも思ひ浮かばなくなった。文泰は病を発して死んでしまった。息子の智盛が即位した(『冊府元龜』卷一〇〇〇外臣部亡滅)。

侯君集は田地城を襲撃し、契苾何力が先鋒部隊となつて死に物狂いで戦つた。その夜、流れ星が城中に墜ちた。<sup>(13)</sup>翌日、田地城は陥落し、唐軍は七千餘人を捕虜にした。中郎將の辛獠兒が輕騎兵を率いて夜間に高昌の都に迫つたので、麴智盛は侯君集に手紙を送つて言った。「天子に対して罪を犯したのは先王の文泰です。先王の咎は深く、罪は堆積しています。智盛は位を継いでまだ日が浅い。公よ、どうか私を赦してください。」しかし、侯君集は答えていった。「よく過ちを悔いるものは、後ろ手に縛つて軍門に下るべきだ。」智盛は答えなかった。唐軍は出撃し、濠を埋め衝車を引き、投石器から飛ばされた石が飛ぶさまは雨のようであつた。城内の人々は大いに震撼した。

智盛は、大將の麴士義に都に留まつて町を守護するよう命令した上で、自身は綰曹の麴德俊とともに唐の軍門を訪れ、改めて天子に仕えたいと懇願した。侯君集は、智盛を降伏させようと考え説得したが、智盛の言葉遣いが傲慢だったので、薛萬均が急に顔色を変えて立ち上がり、「先に城を奪い取るべきである。小僧と話しても話しにならない!」と言つて、指揮旗をふるつて唐兵に進撃を命令したので、智盛は汗を流し地に伏し、「ただ、公の命令に従います!」と言ひ、すぐに降伏した(『冊府元龜』卷三二六九將帥部攻取二侯君集)。

侯君集は軍を分け、高昌をほぼ平定した。およそ、州の数は三、県の数は一五、城は二十二、戸は八千、人口は三万、馬は四千であった。これより前、高昌の人々は童謡をうたっていた。「高昌の兵は霜や雪のようなもの。唐軍は日月のようだ。日月が照れば、霜と雪はほどなく自ら溶けて消滅する。」文泰は戯れ歌を歌い始めたものを捕らえようとしたが、結局、捕まえる事はできなかった。

戦勝報告が長安に届けられると、太宗はたいそう喜び群臣を宴に招いて論功行賞を行った。高昌国の支配下にあった諸都市をゆるし、高昌の地に州県制を設置して、西昌州と号した。しかし、特進の魏徵は太宗を諫めて言った。「陛下が即位なされたとき、高昌は真つ先に朝謁しました。しかしその後、高昌は商胡を劫略し、貢獻を遮つたために高昌王は誅殺を加えられました。麴文泰が亡くなり、罪も止まりました。高昌の民を慰撫し、その子を高昌の王に立て、罪を討伐して民を慰める。これが道であります。いま、高昌の地を利用して、常時その地に千人の兵を駐屯させ、数年に一度、駐屯兵を変えるならば、辺境に派遣される兵士は、装備や旅費を自弁で用意せねばならず、親戚と離別しなければなりません。十年もたたぬうちに隴西（甘肅省）が空虚になりましょう。陛下は結局、高昌の一粒の穀物、一尺の絹も得ることなく、中国の軍事費の助けとすることもできないでしょう。これこそまさに、有用を捨て無用に力を費やすということです。」しかし、太宗は魏徵の意見を採用しなかった（『旧唐書』高昌伝）。西昌州を西州と改め、さらに安西都護府を設置した。一年に千人の兵を徵発し、罪人を送つて守備兵にあてたので、黄門侍郎の褚遂良は太宗を諫めていった。「昔は中華を優先して夷狄を後回しにし、徳化を広めるように務めて、遠方のことは争いませんでした。いま高昌は誅滅され、中国の威光は四方の夷狄を動かししました。皇帝の軍隊が初めて征伐してから、河西は勞役に駆り出されて、急いで米を運び、まぐさを転送して出撃の準備を整えるので、十軒のうち九軒がそうした仕事に駆り出されて貧困になり、五年たつてもいまだに回復しません。いままた一年に駐屯兵を送るなら、荷物は一万里を行き、辺防のために去るものは、

そのための費用と衣装を自分で調達するために、自分の食べ物を売り、はたを売ってまで費用を調達しなければならず、旅程の途上で死亡するものも多く、その数は計り知れません。罪人は、法を犯すことに始まり、なりわいを捨てることに終わり、行いに益がありません。派遣した兵士も逃亡し、役人が逮捕して、逮捕者は芋づる式に相次いで牽かれています。張掖や酒泉のように、敵襲を知らせる土煙があがり、烽火があがった時に、どうして、それより更に遠い高昌の一車両一兵卒を得て救援を得られましょうか？ 隴右、河西から徴発するだけです。たとえば、中国内地の河西を自分の腹心であるとするならば、外地の高昌は他人の手足のようなものです。どうして中華を消耗させて役に立たない事につかえるのですか？ むかし陛下は東突厥の頡利可汗や吐谷渾を平定なされましたが、みな、その故地に君主を推戴しました。罪を犯せばこれを誅し、降伏すればこれを存続させる。これが、多くの蛮族が陛下の御威光を畏れ、陛下の徳を慕う理由です。いま、高昌を治めるべきものを選んで推戴し、首領達を召し出して、ことごとく故国に帰還させ、長く中国の垣根と柱になすべきです。そうすれば中国に乱れはありません。」褚遂良はこのように言って太宗を諫めたが、この書聞は太宗によって省みられることはなかった(以上の魏徵・褚遂良の諫言は『貞観政要』巻九安辺貞観十四年条)。

初め麴文泰は黄金をもって西突厥の欲谷設に篤く贈物をし、危急の際にはお互いに表裏をなして助け合おうと約束していた。そこで、欲谷設は葉護を可汗浮図城に駐屯させた。しかし、侯君集の軍勢が襲来すると欲谷設は恐れて援軍を出撃させず、ついに降伏した。そこで、太宗は可汗浮図城を庭州とした。焉耆は太宗に高昌に奪われた五つの城を返し、駐屯軍を留まらせて守ってほしいと要請した。

侯君集は石に刻んで功を記させ、長安に凱旋した。智盛ら高昌の君臣たちは捕虜として観德殿に献上された。皇帝による礼をつくした酒宴がとり行われ、三日間宴が開かれた。高昌の豪傑たちを中国に移し、智盛に左武衛將軍、金城郡

公、弟の智湛に右武衛中郎將、天山郡公を拜した。麴氏は、国を伝えること九世代、百三十四年にして滅亡した。

智湛は、麟徳年間中に左驍衛大將軍から西州刺史に任じられ、亡くなった。死後、涼州都督を贈られた。智湛には、昭という息子がいた。昭が勉強好きなので、珍しい書物があると、母親は息子のために箱の中からお金を持ち出し、「珍しい本があれば、どうして息子のためにお金を惜しもうか」と言<sup>14</sup>って、書物をことごとく買い求めてやった。昭は司膳卿を歴任したが、文章が非常にうま<sup>14</sup>かった。その弟の崇裕は武芸にすぐれていた<sup>14</sup>ので、永徽年間中に右武衛翊府中郎將に任じられ、交河郡王に封じられた。邑は三千戸に至り鎮軍大將軍で亡くなった。武后は崇裕の死を悼んで美しい錦で織った衣服を贈り、弔いのための賜わりものは甚だ篤かった。麴氏の封爵は、崇裕の死によって断絶した。

## 註

- (1) 『南史』卷七九高昌伝では白暈子。『旧唐書』卷一九八天竺伝も参照。
- (2) 『旧唐書』卷一九八高昌伝によった。
- (3) 『旧唐書』卷一九八高昌伝によった。
- (4) 『旧唐書』高昌伝では「花鈿」。
- (5) 高昌と西突厥の關係に関しては嶋崎昌一九七七・九一を参照。
- (6) 伊吾襲撃事件については嶋崎一九七七・九二～九四を参照。
- (7) 大臣冠軍阿史那矩については嶋崎昌一九七七・九一、二八六～二八七、大臣監軍については嶋崎一九七七・二九四の麴氏高昌国官制一覧表を参照。
- (8) 焉耆事件については嶋崎一九七七・九五～九九。
- (9) 『旧唐書』高昌伝では「日者(かつて、先頃)」。

(10) 『旧唐書』高昌伝では「豈不活耶」となっている。

(11) 『旧唐書』高昌伝では「以撃高昌（高昌を攻撃したい）」との言葉も加えられている。

(12) 『旧唐書』高昌伝では「太宗は高昌が悔い改めるのを願って璽書を下した。」とある。

(13) 「星が城中に墜ちた」との記述は『旧唐書』高昌伝には見えない。臨場感を盛り上げるために『新唐書』の作者が創作して付け加えたのであろう。

(14) 麴昭については『冊府元龟』卷八四〇総録部文章四、『古今事文類聚・後集』卷六人倫部・筭金易書を参照。

### 吐谷渾<sup>とよくこん</sup>

吐谷渾は甘松山の南、洮水の西にあり、南は白蘭を隔てること数千里である。城郭はあるが、国人はその中には住まず、水と草に従って移動する。テントに住み、肉食をする。その国の官職には、長史・司馬・將軍・王・公・僕射・尚書・郎中がある（『隋書』卷八三吐谷渾伝）。おそらく中国王朝の官職の制度をまねて、このような行政組織をつくったのであろう。この国の人々は、文字を知っている。王は、椎髻<sup>ついで</sup>（髪を後ろにたれ、ひとたばねにしたまげ）にして黒い帽子をかぶり、王の妻は錦の袍を着、織り上げたスカートをはき、黄金の花を首に飾った。この国の男性は、裾の長い服（ガウン）を着用し、絹の帽子か、霧籬（べきら）を頭にかぶった。女性は辮髪にし、うしろにたらし、珠や貝殻を綴って髪を飾った（『隋書』吐谷渾伝）。この国の婚礼では、裕福な家は盛大な結婚式を行って嫁を娶るが、貧者は（婚礼を挙げられないので）妻を盗んでいった（略奪婚のことか？）（『周書』卷五〇吐谷渾伝）。父親が亡くなると母親以外の父の妻を娶り、兄が死ぬと兄嫁を妻とした（レヴィレート婚）。喪服には規定（習慣）があり、葬礼が終わるとすぐに解除した。民に対して恒常的に課される税金はなく、不足があれば、富裕商人から税を集めとり、不足分が足りれば徴

税をやめた。およそ、殺人と馬泥棒は死罪になった。その他の罪は、商品を献上させて贖罪させた（『隋書』吐谷渾伝）。その地は非常に寒く、麦、菽（マメ）、粟、蕪（カブラ）を産し、仔馬、ヤク、銅、鉄、丹砂を産出した。青海という湖がある。青海湖の周囲は、八、九百里であった。湖の中に山があり、湖が凍結するのを待つて、その上に雌馬を放牧する。翌年、仔馬を産む。この仔馬は龍種であった。吐谷渾は、むかし波斯馬を得たが、これを青海のほとりで放牧しておいたところ、驄（青白色の馬）の仔馬を産んだ。この馬は、一日に千里を歩いた。それで、人々は「青海驄」と称した（『周書』『隋書』吐谷渾伝）。西北には、流砂が数百里も続いており、夏には熱風が吹き、旅人を傷つけた。熱風が押し寄せてくると、老いたラクダが首をひいていななき、鼻を砂中にうずめる。人はそれによつて砂嵐の到来を察知し、絨毯で鼻と口をおおつて、熱風の害から免れた（『隋書』吐谷渾伝）。

隋の時、王の慕容伏允は步薩鉢を号していた。かつて伏允が中国の辺境地帯に入寇した時、煬帝は鉄勒を派遣して伏允を撃破した。煬帝は西平に城壁を築き、また觀王雄に命じて吐谷渾を破らせた。吐谷渾の王伏允は数十騎を率いて泥嶺に逃亡したが、仙頭王は男女十餘万を率いて隋の軍隊に降伏した。煬帝は、吐谷渾の地に郡県と鎮戍を設置した。それから、伏允の長男で、人質として長安に滞在させておいた順を、逃亡した伏允の代わりに王として推戴した。そして吐谷渾の余衆を治めさせるために、にわかにな順を故国に帰還させた。一方、伏允は党項に亡命し、客人として滞在していたが、隋末の乱の折、隋の混乱に乗じて故地を回復した（『隋書』吐谷渾伝、『旧唐書』卷一九八吐谷渾伝）。

唐の高祖李淵が受命したとき、慕容順は江都から長安に帰還した。このとき李軌が涼州に拠つていたが、高祖は伏允と和睦を約し、伏允が李軌を撃つて唐のために戦つたならば、息子の順を伏允のもとに護送しようと約束した。伏允は喜び、兵を率いて李軌と庫門で戦い、その後、兩軍は退却した。それから遣使して順を帰国させてくれるよう請願した。高祖は約束どおり順を吐谷渾に使わした。順が帰国すると、伏允はこれを大寧王となした。

太宗の時、伏允は使者を遣わして入朝させたが、その使者が帰還しないうちに吐谷渾は鄯州に入寇した。太宗は使者を派遣して伏允の非を責め、伏允を召し出そうとしたが、伏允は病を理由に行けないと言いつた。その上、息子の尊王（『旧唐書』吐谷渾伝）のために公主の降嫁を請願し、太宗の心を試した。太宗は伏允の子尊王を召して自ら歓迎したが、尊王もまた病氣を口実に入朝しなかつたので、太宗は詔を下して、尊王への公主の降嫁を中止にした。太宗は、中郎將の康處真を派遣して伏允の説得に向かわせた。また、伏允が岷州を略奪したので、太宗は都督の李道彦を派遣して吐谷渾軍を撃破し、敗走させた。唐軍は名王二人を捕虜とし、首級七百を斬つた。伏允は、この後、毎年名王を派遣して入貢した。しかし、にわかに吐谷渾が涼州に入寇してきたので、鄯州刺史の李玄運は「吐谷渾は青海で放牧しています。軽装の兵で、これを襲って取り囲めば、すべてを捕獲できます。」と上表した。そこで、太宗は、左驍衛大將軍の段志玄、左驍衛將軍の梁洛仁に命じて、契苾、党項の兵を率いて吐谷渾を征伐させた。しかし、三十里も行かないうちに、戦いたくなかつた段志玄らは陣營を築いて駐屯したので、唐軍の到来に気づいた吐谷渾は、放牧していた馬を駆って逃走してしまつた。副將の李君羨は、騎兵の精銳部隊を率いてこれを追撃し、懸水のほとりで後方から襲撃して、吐谷渾の牛羊二万を捕獲して帰還した。

この時、伏允は年老いて政務を取る事ができなかつたので、大臣の天柱王が政治を掌握し、太宗の使者、鴻臚丞・趙德楷を拘束した。太宗は使者を派遣して勅命を与えること十回に及んだが、吐谷渾からは改悛の言葉は返つてこなかつた。貞観九年（六三五）、太宗は詔し、李靖を西海道行軍大總管に、侯君集を積石道、任城王の道宗を鄯善道、李道彦を赤水道、李大亮を且末道、高甌生を塩澤道の各々行軍總管に任命し、突厥、契苾の兵を率いて吐谷渾を討伐させた。党項に内属する羌族と、洮州羌は、みな刺史を殺害して伏允に帰順した。夏四月、道宗が伏允を庫山で撃破し、捕虜・斬首は四百に及んだ。伏允は、砂漠に唐軍を誘き寄せようと謀り、野草を焼いたので、李靖の軍馬は食糧がなくなつて多

くが飢餓に苦しんだ。そのため対策を講じて道宗は言った。「柏海は河源に近いので、昔からここに至ったものはいまだいない。伏允は西に逃走したというが、その所在は今もって不明である。我が軍の馬は痩せ衰え、食糧も欠乏している。遠方に軍を進めることは難しい。鄴州に駐屯して、馬が元気になってから、再度、吐谷渾征伐を図った方がよい。」しかし侯君集は、「それはいけない。かつて段志玄が鄴州に至った時、吐谷渾の兵は即座に城に拠った。吐谷渾の力はまだ健在であり、むしろ民衆は命令に従った。しかしいま吐谷渾は大敗し、斥候もない。君臣も失われた。我らは吐谷渾の難に乗じ、吐谷渾討滅という志を全うすべきである。柏海は遠いが、将兵を鼓舞して到達すべきである。」（『資治通鑑』卷一九四貞観九年閏四月条）李靖は「よし」と言う。唐軍を二分し、李靖が李大亮、薛万均とともに一軍を率いて北に赴き、その右から出、侯君集と道宗が一軍を率いて南に赴いて、左から出るようになった。李靖の将、薩孤呉仁は、軽騎兵を率いて曼都山で戦い、名王を斬り殺して、斬首五百級を得た。諸将は、牛心堆、赤水源で戦い、敵將の南昌王の慕容孝儒を捕縛して、雑畜数万を捕獲した。侯君集と道宗は、漠哭山に登り、烏海で戦って名王の梁屈葱を捕縛した。李靖は、天柱部落を赤海で破り、雑畜二十万を捕獲した。李大亮は、名王二十人を捕虜とし、雑畜五万を捕獲して、且末の西に軍を宿営した。伏允は図倫嶺に逃走し、于闐に逃亡しようとしたが、薛万均は騎兵の精銳を率いて逃げる伏允を数百里にわたって追跡し、伏允を打ち破った。唐軍の将兵は水が乏しくなったので、馬を刺して、その血を水の代わりに飲んだ。侯君集と道宗は、空しく荒野二千里を進軍した。盛夏にもかかわらず霜が降り、水草は乏しく、兵士は氷をかゆ（食糧）として食べ、馬は雪をまぐさにして食べた。一カ月を経て星宿川に達し、柏海の上には到達し、積石山を展望し、河源を眺望できた。執失思力は、馬を馳せて、吐谷渾の輜重部隊を打ち破った。西軍は、大非川、破邏真谷で遭遇した。

伏允の息子慕容順は隋に人質に出され、金紫光祿大夫に任命されていた。長男の順が人質として中国にいたので、伏

允は、順の弟を太子にした。順は帰国したが、弟に太子の位を奪われたために常に快々として楽しまなかった。順は位を失ったので、功績を上げて皇帝と結びたいと希望していた。そこで、天柱王を斬り、国を挙げて唐に降伏した。伏允は恐れ、千餘騎を率いて積中を遁走した。しかし従う兵士達が伏允を見限って次第に逃亡していったので、付き従う従者はわずか百騎だけとなり、伏允の無聊は極まり、遂に自ら縊れて死んだ。国人達は順を立てて吐谷渾王となし、臣を称して唐に帰順した。太宗は詔して、順を西平郡王に封じ、趙胡呂烏甘豆可汗と号した。太宗は、吐谷渾がまだ十分に安定していない事を恐れ、李大亮に精銳部隊を率いさせて、かの国に駐屯して守らせた。

順が長い間、人質として中国に滞在していたために、国人達は順になつかず、順は臣下によって弑殺されてしまった。国人は、順の息子、燕王の諾曷鉢を擁立した。諾曷鉢はまだ幼く、大臣達は権力闘争をした。太宗は侯君集に詔し、吐谷渾王のそばに付いて国を統治させたので、諾曷鉢は、初めて太宗に向かって、唐の曆を分けて欲しいこと、子弟を唐に入侍させたいことを請願した。また、詔して諾曷鉢を河源郡王に封じ、烏地也拔勒豆可汗と号させた。また、淮陽郡王の道明を派遣し、節を持たせ詔書を下して、諾曷鉢に鼓纛(太鼓と旗)を賜わった。諾曷鉢は自ら入朝して感謝し、公主の降嫁を懇願して、馬牛羊を万匹献上した。諾曷鉢が毎年入朝したので、太宗は宗室の女を弘化公主となして諾曷鉢の妻とし、道明と右武衛將軍の慕容宝に詔して、節を持って公主を吐谷渾まで送らせた(『冊府元龜』卷九七八外臣部和親一貞觀十四年)。しかし吐谷渾では大臣の宣王が跋扈しており、反乱を謀って、公主を襲撃し、諾曷鉢を掠め取って吐蕃に狂奔しようと画策した。諾曷鉢はこれを察知し、輕騎兵を率いて鄯城に逃走した。威信王は兵を率いて諾曷鉢を迎え、果毅都尉の席君買が兵を率いて威信王とともに、宣王を討伐し、兄弟三人を斬ったので、吐谷渾は大いに乱れた。太宗はまた、民部尚書の唐儉と中書舍人の馬周に詔し、節を持って吐谷渾人を慰撫した。

高宗が即位すると、公主が嫁いでいる縁故で諾曷鉢は駙馬都尉を拜した。吐谷渾が名馬を献上したので、高宗が馬の

種性をたずねたところ、使者はこたえて「吐谷渾で最良の馬です。」と言った。高宗は「良馬は人々の惜しむものである。」と言ひ、その馬を吐谷渾に返すよう詔を下した。弘化公主が表して入朝したいと請願したので、高宗は左驍衛將軍の鮮于匡濟を派遣して公主を迎えに行かせた。十一月、諾曷鉢が長安に到着したので、高宗は宗室の女、金城縣主を、諾曷鉢の長男蘇度摸末の妻とし、蘇度摸末に左領軍衛大將軍を拜した。しかし、しばらくして蘇度摸末が亡くなった。そこで弘化公主は、次男の右武衛大將軍・梁漢王・闡盧摸末とともに來朝して、婚姻を請願した。高宗は、宗室の女金明縣主を闡盧摸末の妻とした。

すでに吐谷渾と吐蕃は互いに攻めあい、高宗に上書して、お互いの善悪を訴えて唐に援軍を要請したが、高宗は双方に対して援軍派遣を許さなかつた。吐谷渾の大臣・素和貴が吐蕃に亡命し、吐谷渾の内情を告げたので、吐蕃は出兵し、不意を衝いて吐谷渾の軍勢を黄河のほとりで打ち破つた。諾曷鉢は国を保ちきれず、弘化公主とともに数千帳（数千のテント）を率いて涼州に逃走した。高宗は、左武衛大將軍の蘇定方を安集大使に任命して派遣し、兩國の怨みを静めさせようとした。しかし吐蕃はついに吐谷渾の地を領有した。

諾曷鉢は、唐の国内に移住したいと請願した。乾封初め（六六六年頃）、高宗は改めて諾曷鉢を青海國王に封じた（『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二）。高宗は、諾曷鉢の率いる吐谷渾の部衆を涼州の南山に移住させたいと考えたが、群臣の議論は意見が一致せず、高宗も南山への移住は難しいと考えた（『冊府元龜』卷九九一外臣部備禦四）。咸亨元年（六七〇）、高宗は右威衛大將軍の薛仁貴を邏娑道行軍大總管、左衛員外大將軍の阿史那道真と、左衛將軍の郭待封を副將となし、五万の兵を統率して吐蕃を征伐させ、あわせて諾曷鉢を吐谷渾の故地に帰らせようとした。しかし唐軍は大非川で敗北し、吐谷渾の地はすべて吐蕃に掌握される事となった。諾曷鉢は、親近のもの数千帳とともに辛うじて逃れた。咸亨三年（六七二）、諾曷鉢は浩亶水の南に移動した。諾曷鉢は、吐蕃が強盛である事、自力では吐蕃に抵抗できな

い事、鄯州の土地が狭い事などが理由で、また靈州に移動した。高宗は諸葛鉢のために安樂州を設置し、諸葛鉢に刺史を拜して、安らかに、かつ楽しく暮らせるようにと願った(『冊府元龜』卷九六七外臣部繼襲二)。

諸葛鉢が亡くなると息子の忠が立ち、忠が亡くなると子供の宣超が立った。聖暦三年(六六三)、宣超に左豹韜員外大將軍を拜し、かつての可汗号を襲名させた(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。吐谷渾の他の部族(諸葛鉢が統率する以外の部族)は、涼州、甘州、肅州、瓜州、沙州などの州(敦煌から武威にかけて)に行つて投降した。宰相の張錫と、右武衛大將軍の唐休璟が議論して、これらの吐谷渾人を秦州、隴州、豊州、靈州の間に移住させるようにと言つた。この地から吐谷渾を離れさせることはできなかった。涼州都督の郭元振は、次のように言つた。「吐谷渾が、秦州、隴州に近づけば、監牧と雑居してしまい問題である。彼らを豊州や靈州に置いて、また突厥の勢力に近くなり、それに取り込まれやすい。仮に、彼らを中華の地に住まわせても、その習性を変えることはできないだろう。かつて王孝傑は、河源軍から耽爾乙句貴を靈州に移住させたが、耽爾乙句貴は叛いて牧坊に侵入し、群馬を略奪して州県を痛めつけた。これすなわち、異民族を中国の地に移して利益のなかったことの証拠である。また、かつて吐谷渾の大臣・素和貴が謀反して去つたが、これは唐にとつて損害ではなかった。ただ吐谷渾の数十の部落が失われただけであつた。どうして、耽爾乙句貴の場合と比較しないのか? いま降伏している異民族は、無理やり服従させたのではない。みな吐蕃の弓矢や刃をかくぐり、吐蕃を捨てて来朝した。その事情に従つて、これを制するべきである。甘州、肅州、瓜州、沙州に降伏したものは、その場所に置き、投降したところに住まわせれば、彼らの気持ちも安心しやすい。数州を割けば、勢力はおのずから分散する。彼らの気持ちに順じて、その勢力を分散すれば、人民を乱すことはない。よく夷狄の心を掌握するものと言ふべきである。毎年しずめとどめるための使者を派遣して、宣超の兄弟と懽護すれば、互いに侵攻・略奪する事もなく、なりわいがしつかり安定する。もし叛き去るものが仮にあつたとしても、中国に損害はない。」(『通典』

卷一九〇辺防六吐谷渾所収の郭元振の上奏文「安置降吐谷渾状」。

高宗は郭元振の意見を採用した。宣超が亡くなると、息子の曠皓が後を継いで立った。曠皓が死ぬと、息子の兆が立った。吐蕃がまた安楽州を奪い取ったので、吐谷渾の残りの部族は朔方と河東に移住した。吐谷渾の名称を訛って「退渾」とした。〔旧唐書〕吐谷渾伝、〔資治通鑑〕卷二八二・天福五年十二月の胡三省注)

貞元十四年(七九八)、朔方節度副使、左金吾衛大將軍の慕容復を長樂都督、青海國王となし、可汗号を襲名させた〔冊府元龜〕卷九六五外臣部封冊三。復が亡くなると、後を継承するものが途絶えた。吐谷渾は、西晋の永嘉年間(三〇七〜三一三)から国があったが、龍朔三年(六六三)に吐蕃によってその地を奪われるに至って、およそ三五〇年、ここに及んで、封じる後継者が断絶した。<sup>(1)</sup>

註

(1) 甘肅省武威県で、慕容忠、諾曷鉢の妻弘化公主(西平公主)、慕容忠の妻金城郡主らの墓が発見され、墓誌が出土した(夏竦一九八一・一六八〜二二三、周偉洲二〇〇六・一六一〜一六二)。墓誌は武威市博物館が所蔵。

【唐に亡命した吐谷渾王族の系譜】

慕容諾曷鉢―忠―宣超―曠皓―兆―復(復の死後、継承者がなく吐谷渾王の血統は途絶えた)

焉耆(カラシャール)

焉耆国は、長安の西七千餘里の所にあり、東西六百里、南北四百里であった。東は高昌、西は龜茲、南は尉犁、北は烏孫であった。水路を造って田に水を注いで灌漑した。その土地は、黍、葡萄(ブドウ)をよく産し、魚と塩(塩湖)の利もあった〔北史〕卷九七焉耆伝。この国の風俗は、髪を切り落とし(祝髪)、毛織物を着た。戸数は四千、勝兵の

数は二千で、常に西突厥に役属していた。この国の風俗は娯樂を好んだ。二月には三日間、野に出て祀った。四月十五日、林で遊んだ。七月七日には祖先を祀った。十月十五日には焉耆王が初めて出遊した。一年が終わると祀りも全て終わった(『西陽雜俎』卷四・境異・焉耆国<sup>①</sup>)。

太宗の貞観六年(六三二)、焉耆の王、龍突騎支が初めて遣使来朝した。隋末の乱以来、磧路が塞がったので、西域諸国の朝貢はみな高昌を経由した。突騎支は、大磧道(大砂漠の道)を開通して旅人のために交通の便をよくしたいと請願したので、太宗はこれを許した。高昌は怒り、焉耆の周辺を大々的に略奪した。西突厥の莫賀設は、咄陸・弩失畢と仲が悪く、焉耆に逃亡してきたので、咄陸と弩失畢もまた焉耆を攻めた。そこで、突騎支は遣使して太宗に状況を告げ、あわせて名馬を献上した。莫賀設の次男が啞利失可汗として即位すると、焉耆とはもともと仲が良かったので、焉耆の頼りとなって支援した。貞観十二年(六三八)、處月、處密<sup>④</sup>が高昌とともに焉耆の五つの城を攻め落とし、千五百人を略奪して廬舎を焼いた。(貞観十四年に)侯君集が高昌を討伐しようとし、焉耆に使者を派遣して、焉耆と連合して高昌討伐を行ないたいと言ったので、突騎支は喜び、兵を率いて唐軍を支援した。高昌が唐軍に敗北すると、高昌に捕えていた焉耆の捕虜と城を焉耆に返した。焉耆は改めて唐に使者を派遣して謝恩した(『旧唐書』卷一九八焉耆伝)。

西突厥の重臣屈利啜は、弟のために突騎支の娘を娶った(『旧唐書』焉耆伝)。そのため、屈利啜と突騎支は互いに約束して輔車(持ちつ持たれつ)の關係となり、突騎支は朝貢しなくなった。そこで安西都護の郭孝恪は太宗に焉耆討伐を請願した。たまたま焉耆王の弟・頡鼻、栗婆準、葉護ら三人が来降したので、太宗は、郭孝恪を西州道総管に任命し、軍勢を率いて銀山道から出撃して栗婆準らを道案内として焉耆を攻めるよう命令した。もともと焉耆は都にした場所の周囲三十里が四面すべて大きな山に囲まれ、海水もその外をめぐっていたので、焉耆はこの自然の要害を頼んで恐れることがなかった。郭孝恪は、焉耆に向かって倍速で進軍すると、海水を船で渡り、夜<sup>⑤</sup>のうちに、城壁の物見垣(ものみ

がき)に近づき、夜明け方、大騒音とともに城壁を登った。唐軍の太鼓と角笛が轟き渡り、兵士が攻撃をしかけたので焉耆の人々は混乱して敗北し、千餘人の首級が斬られて、突騎支は捕らえられた。唐は、栗婆準に政務を取らせた。初め、太宗は近臣に語っていった。「郭孝恪は八月十一日に焉耆に行った。二旬(二十日)で焉耆に到着し、二十二日目に焉耆を落城させるであろう。まもなく焉耆からの使者がやってくるよ。」と太宗が近臣に推測を語っていたところ、にわかには焉耆からの飛脚が駆け込んできて、戦勝報告を届けた。突騎支と、その妻子は捕らえられて洛陽に護送された。太宗の詔があつて、彼らの罪は赦された。

屈利啜は軍勢を派遣して焉耆を救おうとしたが、屈利啜が焉耆に着いた時には、郭孝恪が帰還してすでに三日たつていた。屈利啜は栗婆準を捕らえ、さらに吐屯を派遣して焉耆王の代行をさせた。焉耆は唐に遣使して、この状況を告げた。太宗が「焉耆は我々が降伏させた。なんじがどうして王になつたのか?」と言つたので、吐屯は恐れ、焉耆の王になることができなかった。焉耆は、唐の立てた栗婆準を再び推戴したが、従兄の薛婆阿那支は自ら王となつて瞎干と号し、栗婆準を捕らえて龜茲に献上した。<sup>(6)</sup> 龜茲は栗婆準を殺害した。阿史那社爾が龜茲を攻撃すると薛婆阿那支は龜茲に逃走し、東の国境地帯に城壁を築いて唐軍に抵抗した。しかし、阿史那社爾に捕らえられた。社爾は薛婆阿那支の罪を数え上げると、斬り殺して示しをつけた。唐は突騎支の弟婆伽利を王となし、焉耆の地を焉耆都督府となした。<sup>(7)</sup>

婆伽利が亡くなると、国人は前王の突騎支を返して欲しいと請願したので、高宗はこれを許し、突騎支に左衛大將軍を拜して帰国させた。突騎支が死ぬと、龍嬾突が即位した。則天武后の長安年間、焉耆の国が小さく人口も少ないので、焉耆は、この国を通過する使者や客人をもてなす労力に耐えられなかつた。そこで武后は四鎮経略使に詔し、私馬を無料で徴発すること、無品官のものが焉耆で肉食することを禁止した。開元七年(七一九)、龍嬾突が亡くなり、焉吐拂延が即位した(『冊府元龜』卷九六六外臣部繼襲一)。ここにおいて、十姓可汗は碎葉に住むことを請願した。安西節度使

の湯嘉恵は上表し、焉耆に四鎮を備えさせようとした。そこで玄宗は、焉耆、龜茲、疏勒、于闐に詔して、西域の商人に課税させた。諸国はそれぞれ税（通行税）を徴収した。北道を経由していた商人に対しては輪臺で税をとった。焉耆は天寶年間まで常に朝貢した。

## 註

- (1) 今村与志雄訳注『西陽雜俎』一卷・平凡社、一九八〇年、二五一頁。
- (2) 『新唐書』卷二二五下・突厥伝下（西突厥伝）によれば、国土を分け十部族となし、碎葉東方に咄陸五部族、碎葉西方に弩失畢五部族を置いた。
- (3) 『旧唐書』卷一九四下・突厥伝下（西突厥伝）によれば、啞利失可汗は、莫賀設の次男同俄設である。貞観八年、西突厥の可汗に即位した。
- (4) 處月、處密は、西突厥の別部。
- (5) 『旧唐書』焉耆伝に「潜遣将士浮水而渡」とあり、それより補って翻訳した。
- (6) 『新唐書』焉耆伝では薛婆阿那支が自ら即位したと記しているが、『旧唐書』焉耆伝と『資治通鑑』卷一九七・貞観十八年条では、焉耆人が薛婆阿那支を王に推戴したと述べている。これについて松崎光久一九八九・三九は、栗婆準は純粹な焉耆人、薛婆阿那支は西突厥の阿史那氏の血を引いた人物であると解釈した上で次の様に考察した。即ち、唐との連繫を推進する焉耆人は最初栗婆準を推戴したが、西突厥の影響を排除に失敗したため、突厥系の薛婆阿那支を推戴して再び西突厥の支配下に入った、と考えた。
- (7) 『旧唐書』焉耆伝と『資治通鑑』卷一九九・貞観二十二年十月条では、薛婆阿那支の死後、阿那支の従父弟の先那準が王として擁立されている。松崎光久一九八九・四〇は、先那準を純焉耆人であると見る。Les. 1933に従った上で次の様に考

察した。即ち、唐の亀茲征伐によってタリム盆地から西突厥が一掃されたので、突厥系の王（薛婆阿那支）が退けられ、純焉耆人の王（先那準）が推戴されたと考察している。

### 亀茲（クチャ）

亀茲は丘茲とも屈茲ともいう（『通典』卷一九一辺防七亀茲伝）。東に長安をへだてること七千餘里であつた。焉耆より西南に徒歩で二百里の距離であり、小山を越え大河二つを経て、さらに徒歩七百餘里行つて亀茲に到着する。東西の幅は千里、南北は六百里であつた。その土地は、麻、麥（ムギ）、杭稻（うるちのイネ）、葡萄（ブドウ）をよく産し、黄金も産出した。その国の風俗は、歌と音楽、横書きの書をよくし、仏教を尊んだ。子供が生まれると、木で首をしめつけた（『大唐西域記』卷一屈支国）。その国の風俗は断髪で、首のところでそろえた。ただ君主だけは髪を切らなかつた。王の姓は白氏で、伊邏盧城に住んでいた。北は阿羯田山（Ak-tagh）に守られていた。この山はまた白山ともいった。常に火を有していた。王は錦の帽子を頭にかぶり、錦の袍と寶石をちりばめた帯を着用した。新年の初めに羊と馬とラクダを七日間戦わせる儀式があつた。その勝負を観戦して家畜の繁殖を占つた（『西陽雜俎』卷四亀茲国、『太平広記』卷四八一亀茲）。パミール高原以東の風俗は淫行を喜んだので、亀茲と于闐は娼館を置き、売り上げ金を税として政府に納めていた（『魏書』卷一〇二亀茲伝、『北史』卷九七亀茲伝）。

高祖が隋から禪讓された時、亀茲王の蘇伐勃駃（Suvanapusa）は使者を派遣して入朝させた。蘇伐勃駃が死ぬと、息子の蘇伐置（Suvanadeva）が即位し、時健莫賀俟利発と号した。貞觀四年（六三〇）、蘇伐置が馬を献上したので、太宗は璽書を賜い、慰撫して等級を加えた。この後、亀茲は西突厥に臣従した。郭孝恪が焉耆を討伐した時、亀茲は軍勢を派遣して焉耆を支援したので、これ以後、亀茲は朝貢しなくなった（『旧唐書』卷一九八亀茲伝）。

蘇伐暈が死ぬと、弟の訶黎布失畢 (Haripuspa) が即位した。貞觀二十一年 (六四七)、龜茲は二度、遣使朝貢したが、太宗は龜茲が焉耆の反乱を支援した事に怒り、龜茲討伐を議した。この夜、月が昴 (すばる) を食したので、太宗は詔していった。「月は陰の気であるから、これは刑罰を用いる兆しである。星は胡の運命を決める。(すばるが月によって食されたのであるから) 胡 (＝龜茲) の命運は、いままさに終わろうとしている。」(『冊府元龜』卷九八五外臣部征討四) そこで太宗は阿史那社爾を崑丘道行軍大総管に任命し、契苾何力を副官となして、安西都護の郭孝恪、司農卿の楊弘礼、左武衛將軍の李海岸らを統率させて、鉄勒十三部族の兵十万を出動させて龜茲を討たせた。阿史那社爾は軍勢を五つに分け、龜茲の北方を略奪して、焉耆王の阿那支を捕らえたので、龜茲は非常に恐れ、酋長達はみな城を捨てて逃走した。阿史那社爾は積石に至った。ここは龜茲の王城から三百里の場所であった。先に伊州刺史の韓威を派遣して、騎兵一千を先鋒となした。右驍衛將軍の曹繼叔がこれに次いだ。多褐に至り、龜茲王と遭遇し、龜茲の將軍羯獵顛の兵五万と合戦した。韓威が偽って敗走した。龜茲王は、韓威の兵力が少ないのを見ると、指図旗で合図して軍を進め、韓威を追跡した。韓威は退却すると曹繼叔と合流し、戻ってきて龜茲の軍勢と戦った。唐軍は龜茲軍を大破すると、逃げる龜茲兵を八十里も追撃した。龜茲王は城壁をめぐらして守ったが、阿史那社爾が城を取り囲もうとしたため、突騎を率いて西へ逃走した。龜茲城はついに陥落した。その後、郭孝恪が龜茲城に守備隊として残った。

沙州刺史の蘇海政、行軍長史の薛萬備は、騎兵の精銳を率いて龜茲王を追いつめること六百里に及んだ。龜茲王の計画は窮まり、撥換城を保とうとした。そこで阿史那社爾は撥換城を包囲した。一ヶ月が経過して龜茲王と將軍の羯獵顛は唐軍に捕らえられた。大臣の那利は夜間に逃亡すると、西突厥と龜茲の国人万餘を率いて唐軍と戦った。この戦いで郭孝恪とその息子が戦死した。唐軍は混乱した。倉部郎中の崔義起は募兵して城中で戦い、曹繼叔と韓威もこれを支援し、西突厥と龜茲の軍勢を撃破して、三千もの首級を斬った。那利は敗北したが、逃亡したり離散していた者たちを集

めて次第に勢力を盛り返し、龜茲に戻って唐軍を襲撃した。しかし曹継叔はこれに乗じて八千もの首級を斬った。那利は逃走したが、その後、龜茲人によって捕らえられ、唐軍に献上された。阿史那社爾は、龜茲の五つの大城を破り、男女数万人を捕虜にした（『旧唐書』龜茲伝）。そして、使者を派遣して小城七百餘を論して降伏させた。西域諸国は震撼し、西突厥と安国の両国は、降伏のしるしに唐軍に兵糧を献上した。阿史那社爾は、龜茲王の弟の葉護を推戴して龜茲の王となし、石に刻んで功績を記した。

戦勝報告が届けられると、太宗は喜び、群臣に向かって、ゆつたりと云った。「そもそも楽しみというものは幾つかの種類がある。朕はむかし、こう云った事がある。土の城や竹馬を得る事は童子の楽しみである。金翠羅紈を身に飾る事は婦人の楽しみである。その土地にあるものないものを交易することが商人の楽しみである。高官が高い秩を得る事は士大夫の楽しみである。戦つて前に敵がいな事は将帥にとつての楽しみである。四海が安寧で統一されている事は、帝王にとつての楽しみである。だから朕はいま楽しいかな！」そう云うと太宗は群臣にあまねく酒をすすめた。初め郭孝恪が焉耆を討伐した時、龜茲にいた仏教徒で、よく未来を予言できる人が嘆息して云った。「唐はついに西域を領有した。数年もたたないうちに、わが国もまた滅ばされるであらう。」阿史那社爾は、訶黎布失畢、那利、羯獵顛を捕らえて、太廟に献上した。太宗は捕虜達を紫微殿で受け取った。太宗が彼らを責めて云うと、龜茲の君臣はみな頭を地面に打ち付けて身を伏せた。太宗は詔して彼らの罪を赦し、捕虜の身から客人に扱いを改めて鴻臚寺に宿らせ、布失畢に左武衛中郎将を拜した。初めて龜茲の首都に安西都護を移動し、于闐、碎葉、疏勒を統轄させて四鎮と号した。

高宗はまた訶黎布失畢を封じて龜茲王となし、那利、羯獵顛とともに帰国させた。これからしばらくして龜茲王が来朝した。那利は、王の妻阿史那と密通したが、王はこれを禁じることができなかった。左右の近臣が王に向かって那利を殺すよう請願したので、これ以後、王は猜疑心を抱くようになった。王と那利の使者がそれぞれ遣使して高宗に状況

を報告した。高宗は那利を召してこれを投獄し、王を護衛して龜茲に帰国させた。しかし羯獵顛は王の入国を拒み、使者を西突厥に派遣して阿史那賀魯に降伏した。王はあえて進まず快々として死去した(『冊府元龜』卷九九一外臣部備禦四・顕慶三年正月)<sup>(9)</sup>。高宗は左屯衛大將軍の楊胄に詔して兵を出動させ、羯獵顛を捕らえ、その部党を誅した。そして龜茲の地をもって龜茲都督府となした。さらに訶黎布失畢の息子素稽を王となして、右驍衛大將軍を授け、都督に任じた。この年、安西都護府を龜茲に移動させ、かつて安西都護府があつた高昌を西州都督府となした。そして、左驍衛大將軍兼安西都護の麴智盛を都督に任じた。こうして西域諸国は平定した。高宗は使者を諸国に分散して派遣し、各国の風俗や物産を調査させ、許敬宗と史官に詔して『西域図誌』を撰文させた。

上元年間(六七四〜六七六)中、素稽が銀の頗羅(銀の皿)<sup>(10)</sup>と名馬を献上した(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三・上元二年正月)。天授三年(六九二)、龜茲王の延田跌が来朝した。初め、儀鳳の時(六七六〜六七九)、吐蕃が焉耆以西を攻撃したので四鎮はみな陥落した。長寿元年(六九二)、武威道総管の王孝傑が吐蕃を破つて四鎮を回復したので、唐は安西都護府を龜茲に置き、三万の駐屯兵を置いて守備を固めた。ここに至り沙磧は荒廢し、民が貲糧(資金と食糧)を供給する事が甚だ苦しくなった。議者は安西の地を放棄するよう請願したが、則天武后はこれを認めなかつた。安西都護には、政務の実績が中国と夷狄の双方において称賛されているものを選んで任命した。則天武后の時には田揚名、中宗の時には郭元振、開元の時には張孝嵩と杜暹が、各々安西都護を務めた。開元七年(七一九)、王の白莫苾が死去し、息子の多市が即位して孝節と改名した(『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二)。開元十八年(七三〇)、孝節は、弟の孝義を派遣して来朝させた。

## 註

(一)『旧唐書』龜茲伝では「項齊」。

- (2) 馮承均二〇〇四：一一〇。
- (3) 『通典』卷一九一「辺防七龜茲伝が引用する隋の『西域図記』に「白山一名阿羯山、常有火及煙」とある。シャバンヌ (Chavannes 1903 : 115 注2) は、この部分を火山と表記している。
- (4) 今村与志雄一九八〇：二五〇。
- (5) 龜茲が遊郭を営み客から税金を徴収していた事は『魏書』『北史』の龜茲伝に見え、『隋書』『旧唐書』の龜茲伝には見えない。『新唐書』龜茲伝は、四百～五百年前の龜茲の姿を現す『魏書』『北史』に基づいたと思われる。尚、『魏書』龜茲伝の翻訳は内田吟風一九八〇：一一を参照。
- (6) 『大唐西域記』では金花王と呼ばれている(水谷真成一九七一：一五注四、季羨林一九八五：五七、五八注二)。尚、リューダース (Liders 1930 : 27) は、金花王は二人いたと考え、それは初代のスバルナプスバ一世(伝説的な龜茲王で、龍種の馬のエピソードの持ち主)とスバルナプスバ二世(蘇伐勃駃)であるとしたり。尚、『西陽雜俎』『太平広記』には、神通力を持った伝説の王(阿主兎)がいた事を記している。またLevi 1913は、蘇伐勃駃の「駃 (Kue)」は「駃 (che)」の誤りであろうと考察している。羽田亨一九五七：五一〇も参照。
- (7) 蘇伐置Suvanadevaの即位年について中国史書(『新・旧唐書』ともに)に明記がない。しかし近年、クチャのキジルガハ石窟 (Qizil Qargha) 第二十五窟壁面に残されたクチャ語の墨書が解読されて、そこに「スヴァアルナデーヴァ王の治世十九年、虎の年」と書かれていることが判明した。従つてこの王の治世十九年は貞観十六年(壬寅)、つまり西暦六四二年であること、即位年は六二四年であることが確認された (George-Jean Pinault 1987 : 84-85, 160-166, fig.16, pls.80-81)。
- (8) 『資治通鑑』卷一九九貞観二十二年条によれば「西突厥、于闐、安国争饋駝馬軍糧」とある。
- (9) 訶黎布失畢と那利の対立、訶黎布失畢の阿史那賀魯への降伏等については『冊府元龜』卷九九一外臣部備禦四・顕慶三

年正月より補って訳した。

(10) シェーファー二〇〇七・四三三。

龜茲から六百餘里、小さな沙漠を越えると、跋祿迦(パールカー)という小さな国があった。またの名を亟墨といった。漢代の姑墨国(アクス)である。国土は東西六百里、南北三百里であった。風俗と文字は龜茲と同じであったが、言語は少し異なつた。目の細かい毛織物を産出した(『大唐西域記』卷一跋祿迦国<sup>(1)</sup>)。西に三百里進んで石磧を越えると、凌山に至る。これはパミールの北の高原である。水は東に流れ、春・夏も山谷には雪が積もっていた(『大唐西域記』卷一凌山<sup>(2)</sup>)。西北に五百里行くと素葉水(スーヤーブ)城に至る。近隣諸国のソグド商人が商売のために来て雑居していた(『大唐西域記』卷一素葉水城<sup>(3)</sup>)。素葉以西の数十城は、みな君長を立て、西突厥に従属していた。素葉水城より羯霜那国(キシユ、現シャフリサブズ)に至る国は、毛織物、皮ごろも、皮や厚地の毛布を着用し、絹布で額を縛っていた(『大唐西域記』卷一窣利<sup>(4)</sup>)。素葉城の西に四百里進むと千泉に至る。その地はおよそ二百里四方で、南は雪山に面し、三方向には平地が広がっていた。泉や池が多いので千泉と命名した。西突厥の可汗が毎年千泉に避暑にやつて来た。そこには鹿の群れが鈴や金属の環を付けられており、人によくなついていた(『大唐西域記』卷一千泉<sup>(5)</sup>)。西におよそ百里進むと咀邏私(タラス)城があり、ここにも近隣諸国のソグド商人が雑居していた(『大唐西域記』卷一咀邏私城<sup>(6)</sup>)。小さな城があり、三百餘戸あつた(『大唐西域記』卷一小孤城<sup>(7)</sup>)。この地の人々は、もともとは中国に住んでいたが、突厥に略奪されてきて、この地に住んでいた。彼らはいまでも中国語を話した。西南に二百餘里行くと、白水(アクス)城に至る(『大唐西域記』卷一白水城<sup>(8)</sup>)。恭御(コーンゴ)城は<sup>(9)</sup>原隰(平原湿潤)で、地味は肥えていた(『大唐西域記』卷一恭御城<sup>(10)</sup>)。南に五十里進むと菽赤建国(ヌージカンド)があつた。国土の広さは千里で肥沃だったので、作物がよく

稔り葡萄（ブドウ）をたくさん産した。また二百里行くと石国であった（『大唐西域記』卷一菽赤建国<sup>①</sup>）。

註

- (1) 水谷真成一九七一・二七、季羨林一九八五・六六。
- (2) 水谷一九七一・一八、季一九八五・六七。
- (3) 水谷一九七一・一九、季一九八五・七一。
- (4) 水谷一九七一・二〇、季一九八五・七二。
- (5) 水谷一九七一・二一、季一九八五・七六。
- (6) 水谷一九七一・二二、季一九八五・七七。
- (7) 水谷一九七一・二三、季一九八五・七八・七九。
- (8) 水谷一九七一・二四、季一九八五・七九。
- (9) 「原隰」だったのは『大唐西域記』によれば恭御城（コーンゴ）。
- (10) 水谷一九七一・二三、季一九八五・八〇。
- (11) 水谷一九七一・二四、季一九八五・八一。

### 疏勒（カシユガル）

疏勒は佉沙<sup>①</sup>とも言った。国の周囲は五千里で、長安から九千里餘離れていた。砂漠が多く土壤は少なかった。疏勒の風俗は詭詐を尊び、子供が生まれると頭を両側から固定して扁平にした。この国の人々は刺青をし、瞳は青色であった（『大唐西域記』卷十二佉沙国）。王の姓は裴氏で「阿摩支」と自称し、迦師城に住んでいた。（貞観中）西突厥可汗は、

娘を疏勒王の妻にしていた。<sup>(2)</sup> 疏勒の勝兵は二千人であった。この国は祜神(ゾロアスター教の神)を祀っていた(『旧唐書』卷一九八疏勒伝)。

貞観九年(六三五)、疏勒王は使者を派遣して名馬を献上(『旧唐書』疏勒伝)し、四年後(貞観十三年=六三九)にもまた朱俱波・甘棠とともに方物を貢いだ。太宗は房玄齡らに言った。「むかし天下を統一して四方の夷狄にも打ち勝ったのは、ただ秦の始皇帝と漢の武帝だけである。朕は三尺の剣を手に四海を定めたので、遠方の夷狄はおおむね服属した。二君(始皇帝と武帝)に劣らない功績である。しかし二君の末路は自らを保つことができなかつた。公らは、よろしく互いに輔弼しあつて、へつらいの言葉を進めて朕を危機存亡の状態に置かないでくれ。」

儀鳳年間中(六七六-六七八)に吐蕃が疏勒を打ち破つた。開元十六年(七二八)、初めて大理正の喬夢松に鴻臚少卿を兼務させて疏勒に派遣し、疏勒の君主安定を冊立して疏勒王となした(『旧唐書』疏勒伝)。天寶十二載(七五三)、首領の裴国良が来朝したので折衝都尉を授け、紫袍と金魚を下賜した(『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四)。

## 註

(1) 佉沙という国名は玄奘『大唐西域記』卷十二佉沙国(水谷一九七一-三八九、季一九八五-九九五)によつたのである。

(2) 『旧唐書』疏勒伝によれば貞観年間中のこと。

## 朱俱波(カルガリク)

朱俱波は、またの名を朱俱槃といい、漢の時の子合国<sup>(2)</sup>であつた。西夜・蒲犁・依耐・得若の四つの種族を併合してゐた。于闐の西千里、葱嶺の北三百里、西は喝盤陀、北に九百里行くと疏勒、南に三千里進むと女国であつた(『通典』卷

一九三辺防九・朱俱波伝)。勝兵の数は二千人であつた。浮屠の法(仏教)を尊び、文字は婆羅門と同じであつた(『宋雲行紀』朱駒波国)。

註

(1) カルガリクには様々な異名があり、『魏書』卷一〇二では朱居国(内田吟風一九八〇…三二)、『大唐西域記』卷十二では斫句迦(水谷一九七一…三九一、季羨林一九八五…九九八)、『宋雲行紀』では朱駒波国(長沢和俊一九七一…一六八—一六九、一七七注二二)、『通典』卷一九三辺防九では朱俱波と表記されている。馮承均二〇〇四…一一五註一。

(2) 『漢書』卷九六・西夜国伝、『魏書』卷一〇二・悉居半国伝、『北史』卷九七・悉居半国には「故西夜国也。一名子合」とある。別名を子合と言つた(内田吟風一九八〇…七)。

甘棠伝

甘棠は、海の南にあり、崑崙人であつた。

喝盤陀(タシユクルガン)

喝盤陀<sup>1)</sup>は、漢陀とも渴館檀とも言い、また渴羅陀とも言つた。疏勒の西南より剣末谷に入り、不忍領を六百里進めばその国に至る。瓜州を隔てること四千五百里であり、朱俱波の西に隣接し、南は懸度山で隔てられ、北は疏勒、西は護密(ワハン)、西北は判汗国(フェルガナ)と境を接していた。王の治所は葱嶺(パミール高原)の山中に存在した(『通典』卷一九三辺防九・渴槃陀伝)。都城の背後には徒多河(ヤルカンド川)が流れていた(『大唐西域記』卷十二竭

盤陀国)。勝兵の数は千人であった。その国の王はもともと疏勒人であり、代々王位を継承して王となった。西南には頭痛山があった。葱嶺はこの国の人々によって極疑山と呼ばれ、喝盤陀の周囲を取り囲んでいた。この国の人々は強くて荒々しく、容貌と言語は于闐と同じであった(『通典』渴槃陁伝)<sup>(2)</sup>。喝盤陀の法律においては、殺人と剽劫(盗み)を犯した者は死刑であり、それ以外の犯罪者は罪を金銭で贖った(『通典』渴槃陁伝)。租税として必ず服飾を納めた。王は、金の長椅子に座った。北魏の太武帝の太延年間(四三五〜四三九)<sup>(3)</sup>中に初めて中国に通好した。貞観九年(六三五)、使者を派遣して来朝させた。開元中に唐は喝盤陀を打ち破り、その地に葱嶺守捉を設置した。これが安西都護府の最果ての辺境守備隊であった。

## 註

(1) 喝盤陀も史書により表記が異なる。『魏書』卷一〇二では渴槃陁(内田一九八〇:三一)、『大唐西域記』卷十二では渴盤陀(水谷一九七一:三八四、季羨林一九八五:九八三)、『宋雲行紀』では漢盤陀(長沢一九七一:一六九—一七一)である。

(2) 『大唐西域記』卷十二渴盤陀国によれば、国人は勇敢であったが文字言語は佉沙(疏勒)と同じであったという事である。

(3) 「人」は、『太平寰宇記』卷一八六、『文献通考』卷三三九では「金」になっているので、それに従った。

(4) 『通典』渴槃陁によれば、太延三年。

## 于闐(ホータン)

于闐は瞿薩旦那<sup>(1)</sup>とも言い、また渙那とも屈丹とも言った。于闐の事を北狄(北方遊牧民族)は于遁と呼び、諸胡(ソ

グド人)は豁旦と呼んだ。長安を隔てること九千七百里、瓜州から四千餘里離れていた。漢の戎盧・杆彌・渠勒・皮山の五国の故地を併合していた。王の居城を西山城と言ひ、勝兵四千人であつた。この国には玉河があり、国人は夜、月の光がひときわ明るく反射するところを見て、必ず美玉を探し当てることができた。王は絵の描かれた部屋に住んでいた。<sup>②</sup>人々は習性として、策略に長け、大言壯語を好んだ。また祇神(ゾロアスター教の神)や浮屠の法(仏法)に喜んでつかえた。しかし態度は恭しく謹直で、面会する時はみな跪いた。この国では木で筆を作り、玉で印鑑を作つた。国人は書簡を得るとまず首に戴き、それから書を開封した。<sup>③</sup>漢の武帝の時以来の中国の詔書や符節は、于闐の王が代々伝授して受け継いでいた(『通典』卷一九二辺防八于闐伝)。人々は歌舞を喜び、紡績に巧みであつた(『大唐西域記』卷十二瞿薩旦那国)。西には砂漠があり、その砂漠に住む鼠の大きさは蝟(ハリネズミ)と同じで、色は黄金であつた。(鼠の群れの長が穴から)出入りする時、鼠の群れが従つた(『大唐西域記』卷十二瞿薩旦那国・六鼠墳)。初め于闐には桑や蚕がなかつたので、隣国にこれを乞うたが、隣国は桑・蚕を于闐に輸出してくれなかつた。そこで于闐王は隣国に求婚した。隣国が結婚を許したので、于闐王は花嫁を迎える際、花嫁に告げて言つた。「わが国には絹がないので、自国から蚕を持つてきて自ら衣服を作るように。」女(花嫁)はこれを聞くと、綿の帽子の中に蚕を入れて関所を越えたので、関守(関所の役人)もあえてこれを調べなかつた。これ以後、于闐は初めて蚕を有することになった。女は石の上に「蚕を殺してはならない。蚕が蛾となり、飛び去つて初めて繭を処理してよい。」という約定を刻ませた(『大唐西域記』卷十二瞿薩旦那国・八麻射僧伽藍)。

于闐王の姓は尉遲氏で、名は屋密と言つた。もともとは西突厥の臣下であつたが、貞観六年(六三二)、使者を派遣して入献させた。その後三年たつて(貞観九年〓六三五)王は息子を派遣して入侍させた。阿史那社爾が龜茲を平定したので、于闐王の伏闐信は唐を非常に恐れ、息子を派遣して駱駝三百頭を献上した。長史の薛萬備は阿史那社爾に向かっ

て「公が龜茲を破ったので西域諸国はみな震え恐れています。願わくば輕装騎兵をお借りして于闐王を拘束し、京師に献上いたしましょう。」と言ったので、社爾はこれを許した。唐の輕騎兵が于闐に到来し、唐の威靈を連ねて天子のもとに入見するよう勧めると、王の伏闐信は（恐れ入り）使者に従って長安にやって来た。たまたま高宗が即位したので、伏闐信に右衛大將軍を授け、息子の葉護玷に右驍衛將軍を授けて、袍帶と布帛六千段を下賜し、邸宅一区もあわせて授けた。高宗は于闐王をこの邸宅に數ヶ月留まらせてから于闐に帰らせてやった。王は、子弟を留めて宿衛にしてくれるよう高宗に請願した（『旧唐書』卷一九八于闐伝）。上元年間（六七四〜六七六）の初め、于闐王は自ら子弟の酋長や領主七十人を率いて来朝した。伏闐信に吐蕃討伐の功績があつたので、高宗は于闐の地に毗沙都督府を設置して十州に分割し、伏闐雄に都督を授けた。伏闐雄が（天授三年＝六九二）に死去すると、<sup>4</sup>則天武后は、その息子の暲を王に立てた。開元の時、于闐は馬、駱駝、豹を献上した。暲が死ぬと、また尉遲伏師を立てて王となした。尉遲伏師が死ぬと伏闐達が後を継いだので、唐はその妻の執失を冊立して妃となした。伏闐達が亡くなると尉遲珪が王位を継承したので、妻の馬を妃となした。尉遲珪が死ぬと息子の勝が即位した。至徳年間（七五六〜七五八）の初め尉遲勝は軍を率いて国難（を救うため）に赴こうと考え、宿衛として留まりたいと請願した（『旧唐書』于闐伝）。乾元三年（七六〇）、勝は弟の左監門衛率葉護の曜を大僕員外卿、同四鎮節度副使、権知本國事となした。（そして于闐本國の事を任せた）。詳細は、勝の伝に記されている（『旧唐書』卷一四四尉遲勝伝、『新唐書』卷一一〇尉遲勝伝）。

于闐の東三百里の所に建徳力河があり、七百里の所に精絶国があつた。建徳力河の東には汗彌があつた。汗彌の王は、達徳力城（ダンダン・ウィリク）<sup>5</sup>に住んでいた（『新唐書』卷四三下地理志、賈耽の道里志）。達徳力城はまた拘彌城と言った。達徳力城というのは即ち寧彌の故城である。みな小国であつた。

初め徳宗が即位した時、内給事の朱如玉を安西に派遣して于闐の玉を求めさせた。朱如玉は、圭一つ、珂佩五つ、枕

一つ、帶勝三百、簪四十、奩三十、釧十、杵三、瑟瑟百斤、その他の珍宝などを得た。しかし朱如玉は帰国するに当たり、ウイグル人の領地を通過した時にウイグル人に玉を奪われたと嘘を言った。久しくして事は露見し、(市場で)売られていた玉が得られたので、朱如玉は恩州に流刑となり、(その後)死んだ。<sup>(6)</sup>

## 註

(1) 瞿薩旦那の名は『大唐西域記』卷十二瞿薩旦那国(水谷一九七一・三九二、季一九八五・一〇〇二)に従ったのである。

(2) 『通典』卷一九二辺防八于闐伝に「王所居加以朱畫」とあるので補って訳した。

(3) 『通典』于闐伝に「国人得書、先戴於首、而後開封」とあるので補って訳した。

(4) 『旧唐書』于闐伝によれば、伏闐雄は天授三年(六九二)死去した。

(5) 藤田豊八一九三三・二六三〜二七三を参照。

(6) 『冊府元龜』卷六六九内臣部貨貨に、この朱如玉事件が載っている。

## 参考文献および略号一覧

## 史料の翻訳・注釈・考証など

水谷真成一九七一・玄奘著、水谷真成訳『大唐西域記—中国古典文学大系二二』平凡社。

長沢和俊一九七一・『法顯伝・宋雲行記』平凡社(東洋文庫)。

- 護雅夫一九七二：『西突厥伝（旧唐書・新唐書）訳注』『騎馬民族史2—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 佐藤長一九七三：『吐蕃伝（旧唐書・新唐書）訳注』『騎馬民族史3—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 原田種成一九七九：『貞観政要—新釈漢文大系九六卷』明治書院。
- 内田吟風一九八〇：『内田吟風編「中国正史西域伝の訳注」』京都。
- 今村与志雄一九八〇：『段成式撰、今村与志雄訳注「西陽雜俎」一卷、平凡社（東洋文庫）』。
- 季羨林一九八五：『大唐西域記校注』中華書局。
- 岡崎精郎一九八三：『両唐書党項伝訳注—1』『追手門学院大学文学部紀要』一七号。
- 岡崎精郎一九八四：『両唐書党項伝訳注—2』『追手門学院大学文学部紀要』一八号。
- 桑山正進一九九二：『桑山正進編「慧超往五天竺国伝研究」』京都大学人文科学研究所。臨川書店一九九八。
- 張毅・張一純二〇〇〇：『慧超原著・張毅箋釈、杜環原著・張一純箋注「往五天竺国伝箋釈・経行記箋注」』中華書局。
- 余太山二〇〇五：『西漢魏晋南北朝正史西域伝要注』中華書局。
- Edouard Chavannes 1903 : *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*. Paris. Repr. Taipei 1969.  
馮承均二〇〇四：『沙畹著・馮承均訳「西突厥史料」』中華書局。
- Berthold Laufer 1919 : *Sino-Iranica. Chinese contributions to the history of civilization in ancient Iran : with special reference to the history of cultivated plants and products.* ; repr. Taipei 1967.
- Edward H. Schafer 1963 : *The golden peaches of Samarkand : a study of Tang exotics*. Berkeley, University of California Press.
- シエーファー二〇〇七：『エドワード・シエーファー著、伊原弘監修、吉田真弓訳「サマルカンドの金の桃」』勉誠出版。

## ネパール

バジラーチャリヤ一九九九…バジラーチャリヤ編、佐伯和彦訳『古代ネパール史料リッチャヴィ時代の銘文集』明石書店。  
 佐伯和彦二〇〇三…『ネパール全史』明石書店。

## 党項

西田龍雄一九七〇…『西夏王国の性格とその文化』『岩波講座世界歴史第九卷』岩波書店。

岡崎精郎一九七二…『タングート古代史研究』東洋史研究会。

佐藤長一九七八…『チベット歴史地理研究』岩波書店。

青木文教一九九〇…『西藏遊記』中公文庫。

周偉洲二〇〇六…『唐代党項』广西師範大学出版社。

## 東女国

佐藤長一九五八…『古代チベット史研究・上巻』東洋史研究会。

佐藤長一九七八…『チベット歴史地理研究』岩波書店。

山口瑞鳳一九七一…『東女国と白蘭』『東洋学報』第五四卷第三号。

山口瑞鳳一九八三…『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。

松田寿男一九八七…『女国に就いての考』『松田寿男著作集四・東西文化の交流』六興出版。

## 高昌

嶋崎昌一九七七…『隋唐時代の東トルキスタン研究』高昌国史研究を中心として』東京大学出版会。

長沢和俊一九八〇…『唐の高昌遠征について』『史観』一〇二号。

内藤みどり一九八八：『西突厥史の研究』早稲田大学出版部。

〔關尾史郎一九九三：「義和政変」新釈―隋・唐交替期の高昌国・遊牧勢力・中国王朝〕『集刊東洋学』七〇号。

荒川正晴二〇〇八：「遊牧國家とオアシス國家の共生關係―西突厥と魏氏高昌國のケースから」『東洋史研究』六七卷二号。

### 吐谷渾

松田寿男一九八七：「吐谷渾遣使考」『松田寿男著作集四・東西文化の交流二』六興出版。

夏竦一九八一：夏竦著、礪波護訳「武威唐代吐谷渾慕容氏墓誌」(樋口隆康他訳)『中国考古学研究』東京、学生社。

周偉洲二〇〇六：『吐谷渾史』広西師範大学出版社。

### 焉耆

松田寿男一九五六：「西突厥王庭考」『古代天山の歴史地理学的研究』早稲田大学出版部。

松崎光久一九八九：「隋末唐初焉耆王統攷」『内陸アジア史研究』第五号。

### 龜茲

Albert Grünwedel 1912: *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*. Berlin: repr., Kyoto, Rinsen. 1998.

Albert Grünwedel 1920: *Alt-Kutscha*. Kyoto Rinsen. 1997.

Heinrich Lüders 1922: Zur Geschichte und Geographie Ostturkestans. *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen*

*Akademie der Wissenschaften. Berlin. Kl. phil.-hist.*, vol. 24.

Heinrich Lüders 1930: Weitere Beiträge zur Geschichte und Geographie von Ostturkestan. *Ibid.*, Vol. 42.

Sylvain Lévi 1913: Le Tokharien B. Langue de Koutcha. *Journal Asiatique*, 311-380.

George-Jean Pinault 1987: *Épigraphie koutchéenne: I. Laissez-passer de caravanes; II. Graffites et inscriptions*, in:

*Mission Paul Pelliot VIII. Sites divers de la région de Koutcha.* Paris, Collège de France, 59-196: 57  
 planches de photographies.

羽田亨一九五七：「亀茲・于闐の研究」『羽田博士史学論文集・上巻・歴史編』

松崎光久一九八四：「亀茲をめぐる唐と西突厥の情勢」『内陸アジア史研究』創刊号。

### 于闐

藤田豊八一九三三：「西域研究二 扞彌とDandan-Uilik」『東西交渉史の研究 西域篇』荻原星文館（復刊・国書刊行会、一九七四）。